

---

# ここからはじまる物語

滝沢美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここからはじまる物語

### 【Nコード】

N19560

### 【作者名】

滝沢美月

### 【あらすじ】

電車の中で本を読む譲子に声をかけたのは、隣の高校のカンナ。それまで話したこともなかった2人が、電車の中で出会った。この出会いからはじまるものは・・・

## 電車は出会いの場!?

学校帰りの電車の中。

ドアの隅に寄りかかりながら本を読んでいた。最近、はまって読んでいる小説の続きが気になるんだけど、昨日の夜も遅くまで本を読んでいたから眠くなってきた。

電車の揺れが気持よくて、本を読んでいるのに瞼が重くなつてうつとする……

バサッ!

カーブで電車が大きく揺れたのと同時に意識が飛んで、手に持っていた本が落ちてしまった。

立ったまま寝てしまったことが恥ずかしく、あわてて本を拾おうとしたのだけど。

伸ばした手の向こうから、誰かの手がすつと出てきて、本を拾って渡してくれた。

2

「大丈夫?」

私の落とした本を、学ランの男の子が拾ってくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして。あっ、このシリーズ面白いよね。俺も好き」

本のタイトルを見て笑った男の子に、しばらく見とれてしまった

私。

彼は、うちの高校の隣にあるN高校の制服を着てる。綺麗な黒髪・短髪で、私より背が少し高く、顔はわりと整ってる方。万人受けしそうな顔立ち。

「あつ、ごめん。話すの初めてなのに、俺べらべらしゃべって……」

「えっ、そんなことないよ？」

じろじろと観察してた私は、曖昧にうなづく。

「実は、さ……朝、いつも電車で見かけてて、話してみたいなってずっと思ってたんだ」

「えっ?」

急にそんなことを言われてビックリしちゃった。

「うん、同じ電車の同じ車両」

彼は笑顔だ。

「ぜんぜん気づかなかった……」

本当に、ぜんぜん気づかなかったの。

「いつも真剣に本読んでるよね？」

「本、好きだから。このシリーズも面白いのに、友達には子供っぽ  
いって言われちゃって。この本好きな人がいて嬉しい」

私は本が好きで、通学の暇をつぶすために、だいたい車内では本を読んでいる。彼がそのことを知っているということは、本当に朝、同じ電車に乗っているようだ。

私なんか読書に夢中で、同じ電車にどんな人が乗ってるかなんて気にしたことも、考えたこともなかったのにな。

「俺、N高1年の菊池きくち。カンナ。よろしく」

「私は、K高校2年、桜庭さくらば譲子ゆずこです」

「えっ、年上？ 同じ学年だと思ってた……」

その後も、降りる駅に着くまで他愛もない話をした。

??

次の日。

朝ごはんも食べ終わって、行く準備も完璧。

「ごめんね、お母さん寝坊しちゃって。お弁当ももう少しでできるから、まだ時間大丈夫？」

「大丈夫だよ、いつも早めに出てるだけだから。1本遅い電車でも、ぜんぜん間に合うし」

後はお弁当を入れるだけ。TVで朝のニュースを見ながら、お弁当ができるのを待っていた。

「はい、お待たせ！」

お母さんが、台所からバタバタとスリッパの音を響かせてやってきて、お弁当を渡してくれた。

「ありがとうございます。行ってきます」

玄関を出て腕時計を見ると、5分だけいつもより家を出るのが遅い。5分なら、急げばいつもの電車に間に合うだろう。

家を出て、自転車を飛ばして漕ぐ。駅前の大通りを、駅に向かって歩く人や自転車を勢いよく追い越して、あっという間に駅に着き、駅前の駐輪場に自転車を置き、改札へと急いだ。改札を通るとちよつと電車が来たので階段を駆け下り、階段から一番近い最後尾の車両に駆けこんだ。

ギリギリセーフ。

息を切らしながら車内を見渡すと空いてる席はなかったので、いつも乗ってる一番前の車両まで歩きだした。

毎朝乗ってる車両は、進行方向一番前の車両。学校のある国府台こくふだい駅の改札に一番近くて、しかもわりと空いてて座れるのである。電車の時間より早めに駅に付いて、ホームの一番前まで行って電車を待つ。それで電車の中で座って本を読むのがいつものこと。

動きだした車内を、人にぶつからないように慎重に歩きながら車両を移動して、2駅過ぎて、やっと一番前の車両に着いた。

空いてる席があったら座って本を読みたいと思う。どこか空いていないかと、座席の方を見ると、ドアの前に立っている昨日の彼と目があつた。

「おはよ」

菊池君が、満面の笑みで挨拶してくる。

「おはよう」

席はどこも空いていないようなので、そう言って菊池君の傍まで行く。

菊池君は、ほっと息をつき。

「よかったー。昨日、俺が話しかけたのが嫌で、時間ずらされたのかと思った」

顔をかきながら、苦笑する菊池君。

「まさか、そんな。今日はちょっと家を出るのが遅くなって、改札から一番近い車両に飛び乗ったの」

「そっか。よかった」

よかった、って何度も言ってるのが可笑しくて、少し笑ってしまった。

「国府台駅はこの車両が改札近くていいよね。K高も国府台で降りるでしょ？」

「ん？」

「この車両、意外と空いてるし、いいよね」

私の通ってるK高校と菊池君の通ってるN高校は、同じ国府台駅から徒歩数分のところにあって、道路を挟んで隣の敷地に建っている。K高校はそこそこのレベルの公立。N高校はレベルの高い私立。隣同士の高校でも、ほとんど交流がなくN高生のことを意識したことはぜんぜんなかった。

そういえば、駅から学校までの道のり、K高生とN高生、同じくらい歩いている。いつも、始業より少し早めの時間に行ってるから、朝の通学路ではあんまり学生は見かけないけど。

「あのさ、昨日会ったばかりだけど。もしよかったら、朝一緒に登校してもいいかな？」

「えっ!？」

いきなりの提案に、ビックリして大きな声をあげてしまった。

周りにいた人が、チラチラとこっちを見て、また視線を戻している。

「ダメかな？」

小首を傾げて、のぞきこんでくる菊池君。

心なしか、うるんでる瞳。

『だれか拾ってください』って書いてある段ボールに入った子犬のような瞳で見られたら……嫌だなんて言えるはずがないじゃない！

「うっん、いいよ。一緒に行」……」

それに、同じ車両に乗ってて、知り合いなのに一緒に行かない方

が変じやない？

この時は、そんな風に考えていて、まあ、成り行きで一緒に登校することになったのでした。

**電車は出会いの場！？（後書き）**

こんな出会いはどうでしょう？

初めての投稿です。つたない文章ですが、最後までお付き合いください  
さいゝm ( ) m  
ゝ

## 気になる人

「譲！ ついに彼氏ができたのね〜！」

教室の自分の席で本を読んでいた私のところにかけてきた親友の沙世ちゃんの第一声がそれだった。

「なんのこと？」

「もう、とぼけちゃって！ 見たんだから、N高の彼氏と一緒に登校してるとこ！」

その言葉で、沙世ちゃんの言う『彼氏』が誰のことを指してるのかわかって。

「ああ、彼氏じゃないよ。友達」

苦笑して、返す。

ん？ 友達でいいんだよね？ 昨日知り合っただけだけど、友達でしょ？

「えー、だってすごい仲良さそうだったよ？」

友達と言っても納得してくれない沙世ちゃんに、昨日と今朝の出来事の一部始終を話した。

「えー、電車で話しかけられた？ 毎朝同じ電車って、それって譲

に気があるから見てたんじゃないの？」

「そーかな」

私は苦笑する。沙世ちゃんはなんでも、恋愛方面に話を持って行きたがって困ってしまう。

南 みなみ さよ 沙世ちゃんは、高校一年から同じクラスで私の親友。肩までのウェーブヘア茶髪で、おしゃれ大好き、恋バナ大好きな乙女チツクな子。噂話に目がなくて、いろんな情報を知ってるけど、他人事に深入りして騒ぎにしまうことが多々あって……それがたまにキズ。

「菊池君は、誰とでもすぐにお友達になれちゃう子なんだよ、それだけ」

「ホントにいい？」

「ホントだって。とくに連絡先だって聞いてないし、ただの友達」

そうやって私は、誰にも気づかれない様に近くの席に座ってる御堂君をちらっと見た。彼は友達と話してて、こちらを見たりはしない。

「あつ、沙世ちゃん、今日のリーダーの……」

話をそらして、また沙世ちゃんと話し始めた時、御堂君が私を見たこと、2人の会話が聞こえていたことには気づかなかつた。

???

なんか、今日は疲れたな……

結局、あの後も、沙世ちゃんの質問攻めにあって、菊池君のことを根ほり葉ほり聞かれた。そんなに聞かれても、昨日知り合ったばかりなんだからほとんど知ってることもないし、最後にはただの友達だって渋々納得してくれたみたいだけど。

でも、沙世ちゃんと話してて、疑問に思った。

菊池君と私は、どんな関係？

もちろん、彼氏彼女つてのは違うし。友達つて言ったけど、昨日会ったばかりなのに『友達』でいいのかな？ それとも単なる知り合いレベル？ 顔見知り？

考えてると、どんどん分からなくなってくる。

もし、私が菊池君の立場だったとして。毎朝おんなじ電車に乗ってる菊池君に気付いたとして、話しかけるかしら？

私だったら、話しかける話しかけないの前に、その存在自体にも気づかないだろうけど、もし気づいてたら話しかける？

うーん……そうとう興味があつたら話しかけるかな……。でも、ぜんぜん知らない人に話しかけるのは勇気がいるなあ。話しかけるなんてやつは無理かも。

菊池君は、勇気があるなあ。それだけ、私に興味があるってこと？ それとも、ただ単に人懐っこくて誰とでもすぐに仲良くしちゃうだけなのかな。

『それって譲に気があるから見てたんじゃないの』

沙世ちゃんという言葉が、頭をよぎる。

まつさか、ねえ。そんなわけないよ。自意識過剰もはなはだしいでしょ。

私は、身長162cm、胸までの黒髪ストレートヘアで、見た目は明るい方ではない。顔は女友達からはかわいいって言われるけど、ありきたりな普通の顔で、特別かわいいわけではないと思う。今までモテたこともないし。そんな私に、興味を持つのだろうか？

そんなことが頭の中をぐるぐる回ってぜんぜん集中できなくて、図書館での勉強も早々に切り上げて駅に向かって歩き出した。

「譲子さん!」

突然、腕を掴まれて振り返ってみると、そこには菊池君がいた。

「わっ、びっくり……」

いろいろ考えていて、気が付いたらいつのまにか国府台駅のホームまで来ていた。

「譲子さん、ずっと呼んでたのに気づかないで行っちゃうから、気になって」

はぁー、はぁー、息をつきながら言う。

駅前のコンビニで友達としゃべっていた菊池君の前を、私はぼーっと通り過ぎて行って、呼んでも気付かない私の後を走って追って

きたらしい。

「ごめん、ちょっと考え事してたら、駅まで着いちゃった」

「あはは、なにそれ。悩み事？」

また、小首をかしげて覗きこんでくる菊池君。癖なのかな？

「おい、カンナ。急に走ってって、どーした？」

菊池君の友達数人が、階段を上ってホームにやってきた。

「んー、ちょっと知ってる子がいて追いかけてちゃった」

友達と話し始めた菊池君を見て、私はその場を離れようとした。  
ぐいっ。

また、腕を掴まれて菊池君の方へ引つ張られる。

「どこ行くの？ もう電車来るし、一緒に帰ろうっ？」

そう言われたら、一緒に帰るしかないよね……

???

電車の中。

「菊池君は部活帰り？」

私と菊池君は、菊池君の友達から少し離れて2人で立っていた。

「うん、何部だと思う？」

じーつと菊池君を観察する私。学生鞆の他に、ピーナッツ型の大きな鞆を肩から提げている。

「テニス部？」

「あつたり〜！　なんで分かったの？　って、わかるか」

自分の鞆に気づいて笑う菊池君。

「カバン、テニスラケットのでしょ？」

「うん。譲子さんは？」

「私は水泳部」

「えっ、水泳？　まだプール冷たくない？」

ふふっ。

本気で驚いてる菊池君がおかしくって。

「今はまだ学校のプールは水温が低いから、入ってないよ」

「あれ？　じゃ、今日は部活帰りで遅いんじゃない？」

不思議そうに聞いてくる。

「放課後、図書館に行って勉強してたの。もう二週間後に中間試験始まるしね」

「うちも二週間後から試験だよ……。あー、勉強しないとやばいなー。あつ、もしかして昨日も図書館の帰りだった？」

「うん。たくさん本のある空間好きだし、勉強も進むから。つと言つても、半分は本読んじやうんだけどね」

そう言つて、私は苦笑する。

「俺、試験一週間前までは部活で、帰りはいつもこの時間なんだ。明日も一緒に帰れるかな？」

「……えっ？」

『譲のこと、好きだから、一緒に登校しようって言っただんじやないの』

気になる人（後書き）

譲子が悶々と悩む回でした。

## 誤解

「えっと、私と菊池君って……友達、だよね？」

「うん、友達だね？」

私が突然、変なことを聞くから、菊池君は不思議そうにこちらを見てる。

「昨日、話したばかりだけど、俺は友達だと思ってるよ」

だっ、だよね〜！

はあ……

さっきまで、一人で悶々と考えてたのが馬鹿みたい。

「俺は友達だと思ってるし、譲子さんは年上なんだからさ、俺のとカンナって名前で呼んでほしいな」

「えっ？ 名前で？」

そう言えば、菊池君ははじめから私の事を名前で呼んでたなあ。友達とは、名前で呼びあってるのかな？

「友達はみんなカンナって呼んでるし、ねっ！」

そう言って、上から覗き込んでくる。

ちっ、近いんですけど、顔がつつっ！

菊池君にまっすぐ見つめられると、目をそらせないっていうか、逆らえなくなっちゃう。

「わっわかった、名前で呼ぶから、ちょっと離れてっ」

私は、菊池君から顔をそらして言う。

そんなに、見ないで〜！

「カンナって呼んでくれるまで、離さない」

両手で私の頬を挟んで、無理やり顔を向けさせる。目と目があって。

「……カ、ンナ……」

私がそう言うと、彼は嬉しそうに笑う。

私はもう顔を合わせてるのが恥ずかしくって、下を向いて両手で顔を覆う。

友達にこんなことするなんて、反則じゃないですか？ あんな目で見つめられたら、好きになっちゃっても文句言えないよ？

「もう、からかうのはやめて」

とんつ。

カンナの胸を叩いて、そっばを向く。

なんか、ホントに今日は疲れる一日だな……カンナに気づかれな  
い様に、ため息をつく。

「あれ？ 譲子さん、怒っちゃった？」

そっぽ向いたままの私に、あわててカンナが誤ってきた。

「ごめん、ごめん！」

両手を顔の前で合わせて、ペコペコ頭を下げる様子はかわいいのになあ。

普段は、人懐っこい子犬みたいなのに、急に男の子の顔になる時があるから、ドキドキしちゃうよ……

???

月曜日の朝。

「おはよう、御堂君」

地元駅の改札で、御堂君に会った。

「桜庭、おはよ」

「いつもこの時間の電車に乗ってるの？」

朝の駅で御堂君に会うのは珍しくて、聞いてみた。

「今週、週番だから、いつもより早く来た」

あくびをしながら、御堂君が言う。

「そうなんだ、私はいつもこの時間だよ」

階段を下りきってホームに着くと、電車が来るまで、まだ少し時間があるようだった。同じ学校に行くのに、そのまま別れるのも変なカンジがして、御堂君に聞いてみる。

「ホームの一番前まで行ってもいいかな？」

「ああ、いいよ」

私が歩く後ろをゆっくりと御堂君がついてくる。ホームの端に着いた時、ちょうど電車が来て一緒に電車に乗り込んだ。

二人分空いてる席がなかったから、座席の前に並んで立つ。

「御堂君と話すの、すごい久しぶりだね」

ほんとうに久しぶりで、緊張しちゃう。

「そうだな、一年の時はクラス違ったし」

御堂 晃紘君、あきひろ中学三年間同じクラスだった。高校も同じで、一年の時はクラスが違ったけど、二年の今はクラスメイト。クラス替えの時ぶりに話すかな。

なんか話題はないかと考えて、昨日のことを思い出す。

「あつ。昨日、中野達と集まったんだよ。それでね、今度、同窓会やるうかって話になって」

中野とは、中学三年のクラスメイトで私と御堂君の共通の友人だ。

「へえ、おもしろそうじゃん」

「まだ、日にちとかは決まってるじゃないんだけど、御堂君も来られそう？」

そこまで言っつて、自然に話せてるかなって、ちらっと御堂君を見る。

「バイトじゃない日だったら大丈夫」

吊革につかまりながら、そう言っつて笑う御堂君に、しばらく見とれてしまった。御堂君はクールなカンジで、本当に話すのも、笑顔を見るのも久しぶりだったから、ついつい、見とれてしまったの。あまりにじつと私が見てたから、御堂君と目があってしまい……わわっ。

誤魔化すように目をそらして言う。

「あ、奈緒は元気？ 奈緒にも同窓会のこと言っついてね」

一瞬、黙り込む御堂君。

「いや、最近会ってないからわからない。……奈緒とは別れたんだ」  
頭を掻いて、少し困った顔をする御堂君。

「えっ？」

御堂君と奈緒が別れた……？

急に言われた言葉が理解できなくて、黙り込んでしまった。

「讓子さん？ おはよう」

考え込んでいて、カンナが電車に乗り込んできたことにすぐ気付かなかった。

「……あつ、おはよう、カンナ」

ぎこちない挨拶だったかな……

カンナは、私の横にいる御堂君を見て軽く頭を下げる。

「ども」

私と御堂君の間には、気まずい空気が流れてた。

「じゃ、俺、向こうにいつてるから」

「えっ、御堂君？」

カンナが来たら、御堂君はスワツと隣の車両の方へ行ってしまった。

「讓子さんの友達？」

去っていく御堂君を見ながら、カンナが聞く。

「うん。クラスメイトの御堂君」

さっきのことが気になってしばらく考え込んでいると、カンナが聞いてきた。

「邪魔しちゃった？」

カンナを見ると、無表情で、まだ御堂君の後ろ姿を見ていた。

「えっ、違うよ？」

カンナがなぜそんなことを言うのか、なんとなく想像ついて、苦笑いする。

「御堂君とは、駅で偶然会っただけだよ」

なんか言い訳っぽい言い方になっちゃったかな。

「ふん」

困ってる私に、カンナは意味ありげに言う。

???

国府台駅に着いて、私とカンナが歩く少し先を、御堂君が一人で歩いている。

話しながらゆっくり歩いている私たちと、サクサク歩く御堂君はどんどん距離が離れていく。

御堂君は、私とカナナのことをなにか勘違いしたのかな？  
一緒に行く約束をしてると思っ、一人で行っちゃったのかな？  
いろいろ想像してみるけど、御堂君がどういうつもりだったのか  
はわからなかった。ただ、勘違いされたと思うと、少し胸が痛んだ。  
ただの友達だよ、って言いたいけど、もう話す機会もなくて、そ  
んなことは言えないだろうな。

## 誤解（後書き）

更新が遅くなりました（^^）；

カンナ、御堂の初対面です。御堂……愛想ないですね  
カンナは、譲子と御堂の関係をどう思ったのでしょうかね。御堂は御  
堂で、カンナと譲子をどう思ったのでしょうか……

すけてみえる2つの気持ち

学校までの道のり、カンナは楽しそうに話してた。

「昨日はずっと部活でさー」

カンナが御堂君のことを気にしてたのは始めだけで、その後は、週末の出来事を話してくれた。

「休みの日も練習なんて、えらいね」

「もうすぐでつかい大会があるんだ！　なのに今日から試験前で部活停止でしょ。休みの日に練習しても時間が足りないくらいだよ」

「へー、真面目にテニスやってるんだね」

真剣なカンナがすこし可愛くて笑ってしまった。

「うん。部活でも、やるからには勝ちたいしさ！」

力強く言うカンナは、キラキラして眩しかった。すごく前向きなんだなと思った。

「中学の時もテニス部だったの？」

「いや、中学ん時はサッカー」

「運動神経よさそうで、うらやましい……」

つい、本音がこぼれてしまった。

「譲子さんだって、泳げるんだから運動神経いいでしょ？」

そう聞かれると思った……

私は、ため息をついて言った。

「泳ぎは得意なほうだけど、球技は苦手。だから運動神経良いつて  
言えないよ？」

私は、泳ぐことと走ることは得意だけど球技がド下手で、体育は  
いつも平凡な三なのだ、悲しいことに。

複雑な気持ちで言うと、カナナが聞いてきた。

「バタフライも泳げんの？」

「いちお、泳げるよ」

「じゃー、運動神経いいじゃん！」

上から覗き込んできて、言い切る。

なんだか、カナナが言うとそう思えるから不思議だな。

「譲子さんは、週末何してたの？ 休みの日はなにしてるの？」

話が戻って、私のことを聞かれた。

「休みの日は、やっぱり読書かな？」

「読書好きだね」

そう言って笑うカンナ。

「俺も本は好きだけど、漫画が多いかな」

つられて笑う。私も、漫画も好きだよ。

「日曜は、中学の同級生と会ってた」

「へえ、仲いいんだね！ よく会つの？」

「中3の時のクラスはね、男女関係なくみんな仲良かったよ。クラス  
の団結力もあったし」

うんうんって頷きながら、私の話を聞いている。

カンナは、自分の事もたくさん話すけど、相手の話もちゃんと聞  
いてもらいな。一緒に話してて楽しい。私は話すのは得意じゃない  
けど、ついついたくさん喋ってしまふ。

「仲いい友達とは月1回くらいで会うかな？ あっ、今度同窓会や  
ろうって話になってね、さっき御堂君に……！！」

そこまで言って、はっと気づく。

御堂君の話題は避けた方が良かったかなって思いカンナを見ると、  
さっきまで笑顔でこっちを見てたの、今は正面を見てて表情がうか  
がえない。

あまりに喋るのが楽しくて、余計なことを言ってしまった、かも？

「えっと、御堂君とは中学も一緒だね？ って言っても、そこまで仲良くななくて、さっき話したのもすごく久しぶりで……」

私が、あたふたと説明してると。

「ぶっ」

「えっ？」

カンナを振り仰ぐと、お腹を抱えて笑ってる。

「あはは、ごめん。譲子さんが、真剣に悩んでるから……」

笑いすぎて、涙がでてるカンナ。

ひっ、ひどい！

カンナを怒らせちゃったかと思って、私、すごい焦ったのに……

「さっきはみんな仲良かったって言ったのに、今度はそこまで仲良くないって、矛盾してるし」

言っつて、カンナは笑いを堪えようと手を口に当てるけど、結局耐えきれずに笑う。白い歯を見せながらにーっとなんて笑って、こっちを見てる。

私はふうーっとなんてため息をついて。

なんだから、誤魔化そうとしたことが馬鹿らしくなって、言う。

「だって本当。中学の時は仲良かったけど、今はぜんぜん話さないから。ただのクラスメイトってカンジ」

そう言った自分の言葉で、心なしか気分が沈む。

「俺は？ 友達？」

カンナが覗きこんで聞いてくる。

「カンナは友達。カンナがそう言ったでしょ？」

そう言つと、カンナはにこつて笑つて。

「うん、クラスメイトより友達のが仲いいよね？ ならいいや」

## 当たり前

私がついに、カナナは私の事を好きなんだと思う。

……こんなこと言ったら、自意識過剰って思われるかな？

でも、そう思うの。この勘は当たってると思う。

ここ数日、カナナと一緒に登校して、そう感じた。

だからカナナが御堂君に対して、何か気にしてる様子だったのもそのせいだと思う。

???

あの日の朝……

「うん、クラスメイトより友達が仲いいよね？ ならいいや」

そう言って、カナナは笑った。

それから、もう一度確認するように聞いてくる。

「今は、御堂ってクラスメイトよりも俺のが譲子さんと仲いいんだよね？」

カナナは涼しげな眼もとに笑いを含んで私を見た。

私は、カンナのその言葉と表情に、確信を持った。私の事好きなんだ、って。自分が一番仲いいって確かめるように聞いてくるんだ、って。

だから一瞬、返答に詰まっちゃった。

私は顔をぐいっと上げて、カンナを見た。

「クラスメイトよりもカンナとが仲いいよ」

あえて御堂君とは言わずに、曖昧に答えた私。

カンナは、少し皮肉な感じの、でもすごく魅惑的なほほ笑みを浮かべた。

「それでいいよ」

今はまだ、それでいいよ、ってカンナが言った。

カンナが今の関係で満足してるのがわかったから、私もそれ以上何も聞かないことにした。

???

試験が目前に迫っても、カンナは私の下校時間に合わせて待っていて、一緒に帰るのが、当たり前になっっていた。

「試験前は部活ないから、本当は早く帰れるんでしょ？ 待ってるもらって、なんか悪いな」

私が申し訳なさそうに言うと、カンナが首を横に振りながら言う。

「大丈夫。俺も譲子さんを見習って図書館で勉強してんだ。家だと他の事に気がいっちゃって勉強進まないから」

おかげで今回の試験は赤点免れそう、って笑いながら言う。

「明日から試験だね、初日から三教科もあるから大変」

「俺は、明日は二教科だけだ……」

言いながら、カンナはちらっと私を見る。

「じゃ、明日は先に帰ってていいよ」

なんととはなしに私がそう言うと、カンナはちょっと不満げ。

「あーあ。明日、譲子さんに会えるのは朝だけか。寝坊しない様  
気をつけないとな」

カンナは、頭を掻いて言う。きっと、今日は徹夜して勉強するつ  
もりなんだろうな。

「あー、やべえー。寝坊しない自信ない……」

ふふっ。

ずっと、頭を掻いて悩んでるカンナが可愛くって、笑ってしまっ  
た。

「試験の日はいつもより遅い電車に乗ってるの？」

私が聞くと、カンナは頷く。

カンナと出会ってから、毎日、登校も下校も一緒なのだから、時々は会わない日があってもいいと私は思うんだけど。カンナは、なるべく一緒に登下校したいらしい。

「譲子さん、試験中、朝の電車に俺がいなかったら、寝坊だと思っ  
て」

カンナは片目をつむって、申し訳なさそうに言う。

実は、私とカンナはお互いの連絡先をいまだに聞いてない。メアドもケータイ番号も交換してないのだ。

だから、寝坊とかいざという時、お互い連絡を取る手段がないの。今まで、その必要がなかったから、教えあわなかったけど。

もしかしたら、明日からカンナは同じ電車には乗ってこなくて、試験が終わるまで会わないかもしれない。その事をカンナが気にしてるなら、教えた方がいいかしら……

アドレスを教えるかどうか考えている間に、カンナが降りる駅に着いてしまった。

「じゃ」

そう言って、片手をあげて別れの挨拶をするカンナが、一瞬、何かを言おうとして、動きが止まる。

「やっぱり、いいや。じゃ、また明日」

電車を降りて、手を振るカンナ。

「また明日ね」

私もアドレスを言うタイミングを逃して、笑顔で答えて手を振り

返す。

プシューッと音を立てて、電車のドアが閉まる。

閉まったドア越しに、カンナが私を見てる。口が動いた。私はドアに近づき、カンナを見る。

“し・け・ん・が・ん・ばっ・て・” って言ったみたい。

私も、声を出さずに口だけ動かして、“カ・ン・ナ・も” と言う。言い終わる前に電車が動き出して、私もカンナもお互いに手を振って別れた。

??

次の日の朝。

やっぱり、カンナはいつもの電車には乗ってこなくて。その次の日も、その次の日も、試験期間中は会うことはなかった。

試験初日は、朝の電車にカンナがいないことに、少し寂しさを感じたが、二週間前まではそれが当たり前だったのだと思うと、なんとも不思議な気分だった。

試験二日目以降は、電車の中で試験の勉強に夢中になって、カンナの事は全く考えもしなかった。

そうして、あっという間に中間試験が終わっていった。

??

試験明けの朝。

いつもの電車に、カンナが乗ってきた。私が先に気がついて、挨拶する。

「おはよ、カンナ」

カンナは、爽やかな笑顔で言う。

「おはよ、久しぶりだね」

「試験どうだった？」

「んー、まあまあかな」

カンナはうつむきながら、頭をくしゃっと掻いた。

「遅刻はしなかった？」

私が笑いながら聞くと、カンナが苦笑する。

「なんとか……」

そう言って、2人して笑ってしまった。

試験が明けて、また、カンナと一緒に登校する日々が始まった。カンナとはつい二週間前に会ったばかりなのに、いつの間にか、それが当たり前になっていた。

もし、試験前日に、メアドを教え合っていたら、試験中すれ違い

になることはなかったかもしれないとか、そんなことを考えたこともあつたけど。たとえ、会わない日があつても、こうしてまた、当たり前のように一緒に登校する日が来るんだなあ。

ひよんなことから、一緒に登校することになったカンナと私だけど、今ではすっかり友達になつたんだな、と実感する。

ふふっ。

そんなことを考えて、笑ってしまった私を、カンナが怪訝そうに見てる。

まさか、私が今更、カンナを友達と認識したなんて言うのも恥ずかしくて、こう言うことにした。

「ねえ、カンナ。メアド教えてよ！」

## 当たり前（後書き）

これでひとまず、第1章は完結です。

譲子はカンナの事を友達と認識することが出来ました。  
次は、恋愛模様に入入できるといいです。

よかったら、感想をお聞かせください。

## あの頃のわたしたち

中学の三年間ずっと同じクラスで、ずっと気になっていた男の子。サラサラの黒髪、通った鼻筋。落ち着いた雰囲気をもった彼の事がずっと好きだった。

きっかけは、たぶん単純なこと。

中学一年の時、初めての席替えで隣の席になった彼が、普段はシヤイで無口なのに、私と話す時はよく笑ってくれて、ちょっとした会話が嬉しくて、自然と好きになってたんだと思う。

席が離れてからも、時々喋って、男の子の中では一番仲が良かった。彼にとっても私が一番仲の良い女の子で、特別だと思ってた。だから好きって気持ちを伝えなくても、こんなに仲がいいなら、それでいいと思ってた。中学二年の時も、中学三年の時も、その先も。その関係が、ずっと続くと思ってた。でも、それは私の勝手な思い込みだったと知る。

中学三年の時。

初めて同じクラスになったけど、席が近くてすぐに仲良くなった奈緒が、彼の事を好きだと言った時。

私も好きだとは言えなかった。

私も好きだと言えばよかったのに……

それから間もなくして、奈緒が彼に告白して、彼と付き合うことになったと聞く。その時になって、私が彼にとって特別な存在じゃなかったと知った。奈緒と彼が付き合いだしても、彼は私に今まで通り接してくれて、いっぱいいっぱい話したり、笑ったりした。

だから、特別じゃなくてもいいかなって思った。

彼にとって、女の子として一番じゃなくても、女友達として一番だったらいいかなって。

でも、少しして、彼に言われたの。

あまり話しかけないでほしい、って。彼女が心配するから、彼女以外の女の子とは、あまり仲良くできない、って。

はつきり、言われてしまった。

私は、女友達としても一番ではなくなった。彼の中で、彼女の奈緒が一番。それ以外は、一番もなにもないんだって。

もし、私が先に告白したら何か変わってたかな？

もし、あの時……

そう考えることがあるけど、いくら考えても、もうあの頃のわた

したちに戻ることはできないのにな。

彼と話さなくなつてから、あつと言つ間に月日が経ち、中学を卒業。同じ高校に進学したことを、高校に入学して、数日後に知ることとなる。

どこで、なにか間違えたのかな。

あの頃のわたしたちは、あんなに仲が良かったのに。彼女とか彼氏とか関係なく。私も、奈緒も、彼も。みんなみんな、仲が良かったのに。

あれから、二年が経つて。

私と奈緒は、時々メールをするのみ。奈緒が彼と付き合いだしてからは、一緒に遊ぶことも滅多になくて。

私と彼は、同じ高校。一年ぶりに同じクラスになつたけど、以前とは違つて話すこともなく。

彼と奈緒は……

この二年、二人の間にあつたことを私は知らないけど。  
今、彼・御堂君と奈緒は、別れたという。

あの頃のわたしたちは、二年後、こんな風になっているとは思ひもしないんだろうな。

## メールの誘惑

朝、鏡の前で制服のリボンを直してると。  
ブーツ、ブーツ。

携帯のバイブレーション。  
机の上に置いてあった携帯が鳴った。  
携帯を取ってみると、メールが一件。

『From: 菊池 カンナ

subject: おはようー

本文: いま起きた。今日も暑いね』

カンナからのメールだ。

メールを読んで、頬がゆるむ私。

『To: 菊池 カンナ

subject: おはよう

本文: 私はこれから、朝ごはんだよ。今日はすごい暑くなるみた

いー!』

メールを打ちながら、リビングへと降りていく。

さっき見たニュースで、今日はすごく暑くなると天気予報士が言  
っていたのを思い出して、メールに書く。

私とカンナが出会ってから三週間。

あの日。

カンナとメールアドレスを交換した。

それ以来、カンナとはメールをするようになって、カンナは朝起きるとかならずメールをくれる。一時間後には、電車で会うというのに。

私は、というと。

筆不精ならぬ、メール不精で、なかなかメールを返さないんだけど……

いえね、そもそもメールが来たことに気づくのが遅くて、返信が遅れてしまうの。だから、着信に気づいてすぐに返信するのは朝の一回のみ。

カンナもそんな私の性格をわかってくれて、頻繁にメールをするわけでもなく、一日に三、四回やりとりするだけ。おはようとおやすみメールは必ず来るけど。

いつものように朝ごはんを済ませて、家を出る。

今日から七月。

梅雨も明けて、暑い日が多くなってきた。

額に浮かんだ汗を手の甲で拭う。自転車をこぎながら空を見上げると、春には桜並木だった木々の葉の隙間から夏の日差しがちらちらして、眩しかった。

うちの高校は、前期と後期の二学期制。

中間試験が終わって、一カ月も経たないで夏休みがやってくる。他の学校の子が期末試験に追われているこの時期、ただやってくる夏休みを待つだけなのだ。

確か、カンナの通ってるN高も二学期制って言ってたな。

もちろん、授業は普通にあるし、二学期制で試験の回数が少ない分、一回の試験範囲が広くて大変ではあるけどね。

そんなことを考えてて、駅に着いて、定期を出そうとカバンの中に手を入れて探つてると、携帯が鳴った。

見ると、中学の同級生からだった。

『From:三井 夕貴みつい ゆき

subject:3-A同窓会のお知らせ

本文:7月24日(土) 18:00) たぬき亭で、3-A同窓会をやりませ。

参加できる人は、三井まで返信よろしく!

全員にうまく連絡いってないかもしれないから、他の人も伝えてね!』

あつ、この間話してた同窓会の日にち決まったんだ。

改札を抜けて、ホームを歩きながらメールを読む。

中学三年のクラスメイトはみんな仲良くて、その中でも特に仲が良い仲間とは二〜三カ月に一度集まっっていて、メールの送り主の三井夕貴も中間試験前に集まった時に会っている。

でも、同窓会って形で集まったことは、卒業以来一度もない。今回が初めての同窓会ということになる。

卒業以来会っていない友達に会えるのも嬉しいし、三年A組のみんなが集合すると思うと中学生の頃が懐かしくなって、うきうきと

した気持ちになる。益々夏休みが楽しみになってきたな。  
電車に乗り込んで、メールを打つ。

『To:三井 夕貴

subject:同窓会

本文:日にち決まったんだね。夕貴が幹事? 参加するのでよろしく』

すると、すぐに返信が着た。

『From:三井 夕貴

subject:そう?

本文:私が幹事することになったんよ……、中野に押しつけられた。

譲子参加で了解!

そういえば、御堂と同じ高校だよね? 私、御堂のアドレス分かんないから

譲子から伝えてもらうことってできる? あと、須藤さん  
もお願い』

って……!

ええっと、別にいいんだけどね。

別にいいんだけど、ちょっと気が進まないなあ……

そう思いつつ、慣れない手つきで、またすぐにメールを打つ。

『To:三井 夕貴

subject：了解

本文：御堂君とは今年、同じクラスだから、学校着いたら聞いてみるよ』

別に、御堂君に聞くのは構わないんだよ。この間、同窓会の話題はしたし。

ただ、その時の事を思い出すと、同時にあの事も思い出しちゃって……

『……奈緒とは別れたんだ』

私は、カチカチとメールを打つのに夢中で、カンナが目の前に立っていることにぜんぜん気づかなかった。

「譲子さん？ めずらしいね、ケータイいじってるなんて？」

急に声をかけられて、びっくりして顔を上げる私。

立ってるカンナが覗きこむように私を見てて……  
パタンッ。

焦って携帯を閉じてカバンにしまっちゃった。

カンナが不思議そうに首をかしげる。

「なんでもないよ」

そう言って、話をそらしてしまった。



## メールの誘惑（後書き）

第2章のスタートです！

夏休みが近づき、カンナ、譲子、御堂の関係が徐々に変わり始める

……

新たな登場人物も増えて！

この章は長くなりそうですが、更新はわりと早くできそうです。

## 夏休みまであと20日

無理やり、話をそらしちゃったけど、カナナは特に突っ込んでこなかった。

「夏休みまであと二十日だね」

そんなことを言っつて、楽しそうにしてる。

「夏休み楽しみなの、カナナ？」

私も夏休みは楽しみだけど聞いてみる。

「楽しみ！ まっ、ほとんど部活でつぶれるだろうけど、学校は面白いね」

前髪をいじりながら喋るカナナ。

「譲子さんも休みは部活？」

「うん、七月から部活も毎日になるしね」

「えっ、じゃあ今日から放課後は部活？」

「うん」

私は、水泳部。

　　と言っても、うちの高校のプールは屋外だから、七月から九月の間しか入れないんだよね。だから、毎日部活があるのはその三カ月だけで、それ以外の期間は週一・二回、市のプールに練習に行くの。

　　今日から、七月でプールも解放されるから、部活も毎日になるんだ。

　　まあ、七月の初めは気温によって入れない日もあるから、朝練はほとんどないんだけど。

「カナナは、今日も朝練なんですよ？」

「うん、大会まで二週間ちょっとだから。放課後の部活も長引くと思うからしばらく一緒に帰れないねって言おうと思っただけ、譲子さんも部活じゃどっちにしる無理だったね」

残念そうに言うカナナ。

「うん。しばらく、帰りは別々かな？」

私も、そう言って苦笑する。

「あーあ、しばらく一緒に帰れないのか……、あつ、夏休みになったらますます会える日減っちゃうじゃん！」

そう言って、しょんぼりするカナナ。

「そうだね。お互い部活があっても、始まる時間は違つだらうから」  
カンナのテニス部は午前九時から午後六時くらいまでびっちり練習するらしい。私の水泳部は十時から十二時くらいで終わると思う。

「夏休みは、同じ電車つてわけにはいかないね」

私がそう言うと、カンナはますます不満そうな顔をする。  
ふふっ。

そんな顔をするカンナは子供っぽくて、かわいくて、ついつい笑つてしまった。

「ひどいな……譲子さん、笑うなんて」

そう言つてふてくされた顔も、なんだかかわいいんだ。

「夏休みまで、まだ二十日もあるし、いっぱい一緒に帰れるよ」

なぐさめるように言つと。

しばらく黙りこんで、カンナがぽつんと言つた。

「二十日したら、会えなくなっちゃうのか……」

「あっ、そうだ！ 夏休みの土日は部活ないから、譲子さん遊ぼうよ」

突然思いついたように、カンナが言う。

普段カンナは、土日も部活があつて、休みの日に会つたことは一

度もない。でも、さすがに夏休みの土日は部活もお休みみたい。

「うん、いいけど……」

カンナが、目をキラキラとさせて嬉しそうに言うものだから、即答してしまった。

「やった！ 譲子さんとデートだ！」

なーんて、カンナが言うものだから、びっくり！

デート？

「えっ？」

バサッ。

あまりにびっくりしすぎて、手に持っていた定期を落としてしまった。

私は、国府台駅の改札を出たところで、立ち止まる。

「譲子さん、どこか行きたいところある？」

カンナは、私が止まってることには気づかず、てくてく歩きながら話を続けていた。

「あれ？ 譲子さん？」

駅の建物を出たところまで行ってようやく私が隣にいないことに気付いたカンナが、戻ってきて私の顔を覗き込む。

自慢じゃないけど、私はいままで、付き合ったこともなければ、“デート”もしたことがないの。  
だからいきなり“デート”とか言われると、その単語だけでトギマギしてしまうじゃないのーっ。  
言う、言うぞ！

私は、キツとカンナを見上げて……

「なんでもない……」

はあー。

どつとため息をついて、とぼとぼと歩き始めた。

カンナの端正な顔を見たら、言いたかったことも言えなくなっちゃったじゃない。

カンナは、不思議そうに首をかしげながら、足早に私を追いかけてきて、すぐに横に並んで歩き出した。

## デートの約束

「二十四日」

突然、そう言われて、びっくりして、カンナを仰ぎみる。  
瞬間。

ばちっ。

私とカンナの目が合って。

宝石みたいにキラキラした綺麗な瞳にじいーっと見つめられて、  
私はカンナをまじまじと見てしまった。

あまりにじろじろ見すぎたのかしら。

私の視線の先で、カンナがカツと赤くなって、ふいっと顔をそらしたの。

55

「二十四日は会える？」

顔をそむけたまま、言った。

見ると、カンナは耳まで真っ赤になってる。

あら、照れちゃって、可愛い。

「えっと、その日は中学の同窓会があるから」

同窓会は夕方からだけど、同じ日に予定を二つもこなせるほど私は器用な性格じゃないから。

「できれば、違う日がいいかなって……」

そんな理由で断るのが悪いなって思っ、だんだん声が小さくなる私。

「了解、予定があるなら仕方ないね。じゃ、二十五日なら大丈夫？」

「うん、二十五日は大丈夫」

一度断ってるから、即答で答える。

「じゃ、二十五日会えるの楽しみにしてる」

そう言っ、笑うカナナ。

「どこ行くかは、また今度決めよう！」

N高の校門まで、もうすぐのところで。

カナナと私は別れ、私は少し歩いてから道路を渡って、K高の校門へと向かった。

???

教室に入ると、まだ誰も来ていなくて。

私は鞆を置いて、一緒に持ってきていたプール道具を持って、水泳部の部室に向かった。

部室にも誰もいなくて。体育教官室で、プールの鍵を貰って、とりあえず気温と水温を確かめに行く。朝はまだ、プールには入れな

さそうだった。

水泳が好きなのは、泳ぐときの水の感覚が気持ち良いことと、泳いでる時は自分の世界に浸れるところかなー。

あー、早く泳ぎたいなあ……

そんなことを考えつつ、頭の片隅でもう一つの事を考えていた。

『あ、奈緒は元気？ 奈緒にも同窓会のこと言っというてね』

『いや、最近会ってないからわからない。……奈緒とは別れたんだ』

御堂君……

奈緒……

実はあの日以来、御堂君とは話していない。

今朝、夕貴に頼まれた同窓会のことを御堂君に伝えるってことは……御堂君と話すっていうことは、どうしても、またあの話をしなくてはならないような気がして、ずっと切り出せないでいた。

プールと部室棟をつなぐ渡り廊下の手すりに寄りかかりながら、ぼんやりと空を見上げる。

教室に帰って、御堂君が登校していたら、話さなくてはならない。そう思うと教室に向かう足取りが重くて、教室に戻りたくないよ  
うな気にさえなってくる。

ひたすらボーっとして、始業のチャイムが鳴るのを待っていたんだけど、こんな時に限って会ってしまふものなのかな。

「桜庭？ 何やってるんだ？」

その声をかけてきたのは、他でもない御堂君。  
いま一番会いたくなかった人……

「ん……」

私はそう言って、黙りこんでしまった。

御堂君は、奈緒と別れたって言ってた……

そのことについて触れていいのか、私なんか聞いていいのか、  
ずっと迷ってた。

「あのね……」

7月24日・・・午前

『それで、どうしたのさ?』

受話器から聞こえる声に答える。

「結局、聞けなかった……」

自分の部屋。

床に座ってベッドに寄りかかりながら、携帯を片手に話す。  
夏休みになって四日目。

今日は七月二十四日。夕方から、中学の同窓会がある。

電話の相手は、三井 夕貴。

『なーんだ、聞いちゃえばいいのにー』

「聞けないよ……だってなんて言うの?」

私が、情けない声で言うと。

『それはさ、「どうして奈緒と別れたの? 私と付き合って!」「って  
ー』

私の声を真似た口調で言って。  
はははっ。

と、受話器から夕貴の笑い声が聞こえてくる。

「なに、その最後の、付き合って！ って？ ぜんぜん関係ないし！ ってか、もうそんなんじゃないし……」

はあー。

ため息をつきながら、私はあきれて言う。

『へえー、もう御堂のことは吹っ切れたんだー？』

そう言って、興味津々で聞いて夕貴はまた笑う。

自分でも不思議だけど。

御堂君のことは気にはなる。でも“好き”とかそういう対象ではなくなってきたことに、うすうす気づいている自分がいたの。

「うん……、吹っ切れそう、なんだと思う……」

それは、カンナの存在のおかげだと思う。

カンナの事を好きかって言われると、まだ『友達』の関係だと思うけど。

カンナが私に対して抱いてる好意が、態度が、私の御堂君に対する気持ちをやわらげてくれた。

私の中で、私と御堂君の時間は二年前のあの時で止まっているよな気がするけど。それが、カンナをきっかけに、また御堂君と話すようになって動きだした気がする。

うつん。

動かさなきゃならないと思う。

あの時の気持ちに、そろそろ決着をつけなきゃいけないんだ。

でも。

いざ、御堂君と話すと、好きだった気持ちを思い出して、ドキドキしちゃって、うまく話せないんだよね。

あの日も。

???

「あのね……この間話してた同窓会なんだけど、今日、夕貴からメールが来て、七月二十四日にやることに決まったって」

うつむいたまま、御堂君の方を見ないで言った。

「そっか。行けるかどうかは、教室戻ってバイトのシフト見ないと分からないから、またあとでいい?」

そう言って、私を見る御堂君。

……

しばらくの沈黙。

「御堂君!」

私は顔をあげて、御堂君を見る。

「ん？」

首をかしげながらこつちを見た御堂君。

「あの、なお……」

私がそこまで言ったところで、腕時計を見ながら御堂君がさえぎる。

「あつ、悪い。体育の佐藤に呼ばれてて、そろそろ行かないと……」

「佐藤先生に？ ……そつか、ごめん、じゃあ、またあとでね」

じゅつと、片手をあげて、駆けていく御堂君。

御堂君の後ろ姿が、教官室のある体育館の中に消えていくのを見送ってから。

はぁー。

大きなため息をつく。

私、なにやってんだろ……

『奈緒にも連絡してくれる？』

そんなこと言ったら、また御堂君が辛い顔するのわかってるのに

……

どうして奈緒と別れたのか、聞きたいけど。

聞けないよ……

その後教室で、御堂君が同窓会に参加できるという返事をもらった。

結局、奈緒の事は聞けなくて。奈緒には、私から直接メールをして同窓会のことを伝えた。奈緒にメールするのはすごい久しぶりだったから、要件のみを伝えると、参加すると返信が来た。

??

『今日、須藤さんも来るんだよね？ 御堂も須藤さんも揃うなら、もう、直接須藤さんに聞いちゃえば？』

のんきな声で、夕貴が言う。

その日の事を回想してた私は、夕貴の言葉で、現実を引き戻される。

「奈緒に？」

『そう！ 御堂のことぶっきれたとか言ってるけど、譲子、ホントはまだ気になるんじゃないのー？ もう、はっきり聞いてぶっきちやいなよー』

「んー」

私は、曖昧にうなづく。

聞きたいのか、聞きたくないのか、自分でもはっきりしないからだ。

『讓子が聞けないなら、私が聞いてあげるよー』

なーんて、夕貴が言う。

いくらなんでも、それはいきなりすぎて。無理な話だと思って、止めようと思っただら。

『あつ、ごめん。そろそろ切るねー。同窓会の準備で中野ん家行かなきゃだからー』

ツッー、ツッー。

そう言っつて、一方的に夕貴は電話を切ってしまった。

私は、ふうーっとため息をついて、ぱたんっと携帯を閉じて、しばらく、携帯を見つめる……

夕貴はああ言っつたけど、まさか夕貴から聞くっつてことはないだろっつと思ひ、携帯を机の上に置いて、出かける準備をはじめた。

## 同窓会・・・直前

お昼ごはんを食べ終わって部屋に戻ってくると、机の上の携帯がメール受信を知らせてピカピカと光っていた。携帯を開いてみると、カンナからのメールだった。

『From：菊池 カンナ

subject：明日

本文：T 駅に集合でいいかな？

映画もあるし、カラオケもあるし……何するかは行つてから決めよう。

実は、いま起きた……』

??

七月に入ってから。

カンナとは、放課後はそれぞれの部活が忙しくて、朝も、大会前のカンナは朝練がいつもより早くから始まったりして、ほとんどすれ違っていた。

だから、遊ぶ約束はしたものの、具体的にどうするかか決められないまま、時間が経っていった。

七月二十日、終業式。

その日、久しぶりにカンナに会った。

「おはよ、譲子さん」

久しぶりに見たカンナは、日焼けして、すこし黒くなっていた。

「おはよう、カンナ」

私は、カンナが朝練と一緒に登校できない間は、久しぶりに読書を楽しんでいた。読んでいた本を閉じて、鞆にしまう。

「明日から、夏休みだね」

そう言うと、カンナはうんざりした感じで。

「あー、もう夏休みとか関係なく部活だからなあ……、さすがに今日は部活ないけど」

部活がんばってるカンナだけど、七月に入ってから朝も放課後も土日もずっと練習だったから、すごい疲れてるみたい。

昨日までの三日間は夏の大会があつて、それで一段落なのかと思つたら、まだ八月にも大会があるらしく、夏休み中もハードに部活があるんだって。

「夏休みも忙しそうだね」

私が疲れた様子のカンナを見て苦笑すると、カンナも苦笑して。

「うん、でも好きでやってるから。それに、夏休みも譲子さんに会えるって思えば頑張れるよ」

にじつ。

言って、うつとりするような甘い顔で笑う。  
うつ。

ずるい。

そんな素敵な笑顔を見せられたら、好きになっちゃいそうだよ。  
そうして、二十五日以外にも、夏休みに会う約束をさせられてしまったのだった。

??

私は、携帯を両手で持って、カチカチとメールを打ち始めた。

『To: 菊池 カンナ

subject: OK

本文: それでいいよ。何時に集合?

私はもうお昼ごはん食べたよ。もう少ししたら出かけるんだ』

ベットに座って垂らした足をブラブラさせながら、時間を確かめた。

今は午後一時。

同窓会は六時からだけど、少し早めに行って買い物でもしようかな。

実は、同窓会をやるためき亭があるのも、明日、カンナと会う約束をしたT駅なの。

メールを打ち終わって携帯を鞆にしまい、家を出た。

学校に行く時に乗るのと同じ電車に乗って一駅。そこで乗り換え  
て一駅。T駅に着く。

T駅はこのあたりでは一番大きな駅で、駅前にはデパートや大き  
なショッピングモールもある。

たぬき亭はそのショッピングモールの側にあるお店で、中三のク  
ラスメイトだった中野の両親がやっている洋食屋さん。コロッケが  
とってもおいしいの。

中学の卒業式の打ち上げも、そのたぬき亭でやっている。

T駅に着いて、ショッピングモールに向かって歩いてると、携帯  
が鳴ったことに気づく。

『From: 菊池 カンナ』

subject: 10時でいいかな？

本文: そういえば、今日同窓会だったっけ？ 楽しんできてね！

俺も、今から友達と出かけるよ』

カンナからのメールだった。それともう一件。  
開いてみると……

『From: 須藤 奈緒』

subject: 無題

本文: 今日の同窓会が終わった後に、話したいことがあるの。

聞いてくれる？』

奈緒からだった。

なんだろう……聞いてほしいことって……

すつごく嫌な予感がするのは、私の気のせいかしら。

奈緒とは、今でも友達だと思ってる。でも、奈緒の方はどうなんだろうか。

奈緒は、御堂君と付き合い始めてから、私とはめったに遊ばなくなつたし、卒業以来メールは時々してたけど、会ったことは一度もない。

そもそも、御堂君に私と話さないでって言ったのも、奈緒なんだよね……

奈緒はもしかしたら、私の気持ちに気づいていて、だから私と御堂君を話させないようにさせたのかしら。

その奈緒が、今さら、私に何の話があるというのだろうか……

そんなことを悶々と考えながら歩いていたら、人とぶつかってしまつた。

ドンッ！

「あつ、ごめんなさい……」

相手の顔を見ずに、ペコペコ頭を下げて謝る私。

そしたら。

「桜庭？」

その声を聞いて顔を上げると、御堂君が目の前に立っていた。

「えっ、あれ、御堂君？」

まさか、ぶつかつたのが御堂君だったなんて。びっくりして、しばらく見つめていると。

「もしかして、桜庭も中野に呼び出されたのか？」

「えっ、中野？」

突然、中野の名前が出てきてびっくり。

なんで、中野？

私が、ぼかんとして、首をかしげると。

「あれ、違つた？ 俺は、中野に同窓会の準備手伝えって呼び出されたんだけど……」

そーいえば、夕貴も同窓会の準備で午前中からたぬき亭に呼び出されたつて、電話で言つてたな。

「あー、夕貴も呼び出されたつて言つてたけど、もしかして、手伝い足りないのかな？ 私も行った方がいいかな？」

特に目的があつて早く来たわけでもないから、手伝いに行こうかな。

「あー、まあ、人手は多いに越したことはないと思うけど。大丈夫？」

用事があつて早く来たんじゃないのか、つて御堂君が聞く。

「うん、ぶらぶらしよつと思つて早く来たただだから、手伝つよ」

それで、二人でたぬき亭に向かった。

しばらく歩いて、手に持ったままだった携帯に気づく。

あつ。

カンナと奈緒に返信しないと……

「ちょっとメールしてもいい？」

いちお、一緒に歩いてる御堂君に聞いてみる。

「ああ」

御堂君が頷く。

さて、なんと返信しよう……

携帯画面を顔の前に掲げて、うーん、うーんと悩む。

とりあえず、カンナから返信しよう。

そう思っ、受信ボックスからカンナのメールを選んで“返信”を押す。

『To: 菊池 カンナ』

subject: 了解！

本文: 十時ね。

そう、同窓会。いま御堂君に会って、一緒に向かっていると  
『だよ』

そこまで打って、こんなこと書いちゃいけないなっと思って、二

行目を消しにかかる。

ピッ、ピッ、ピッ……

考えながら両手で携帯を操作してたから、歩くのが遅くなっちゃって、いつの間にか御堂君と離れていた。

小走りで御堂君に追いつくと、御堂君が私の手元を見て。

「メールって、こないだ一緒だったN高のヤツ……?」

「えっ?」

急にそんなことを言われて、携帯のボタンをいじってた手がぶれる。

ピッ。

「あっ!」

あわててボタンを押したものだから、ボタンを間違えて書きかけのメールを送信してしまった……

「大丈夫?」

御堂君が、眉根をよせて聞いてくる。

「だいじょうぶ……」

「N高のヤツにメール?……もしかして、付き合ってるの?」

まさか、御堂君にそんなこと聞かれると思ってなくて。びっくり。

「メールは……そうだけど、付き合っではないよ」

電車でカンナと御堂君が会った時、付き合ってるとか誤解されてたらどうしようって思ったけど、御堂君からこの話題に触れてくるなんて思いもしなかった。

もし誤解してるなら、誤解を解きたいって思ってた。だからちゃんと言わなきゃ。

「N高の彼は、あっ、菊池君って言って。たまたま電車で話して友達になったんだよ」

ドキドキっ。

これで、ちゃんと伝わってるかな……

「そうなんだ……」

そう言った御堂君を見上げると、涼やかな眼差しで前を見ていた。

それから、御堂君はずっと無言で歩いてて、あっという間にたぬき亭に着いてしまった。

だから、私も、すっかり忘れていたの……

カンナに、間違っって書きかけのメールを送ったことも。

奈緒から来たメールのことも。すっかり。

## ついにはじまった同窓会

ざわざわ……

たぬき亭の店内は、大勢でにぎわっていた。

同窓会は、なんと全員集まることができて、久しぶりに会う友達同士、あちこちで盛り上がっていた。

「譲子！」

飲み物のお代わりをしようと思って、厨房に近づいた私に、声をかけてきたのは夕貴と中野。

「準備、手伝ってくれてサンキューな」

中野が言う。

「もう、中野が手伝いに声かけたヤツら、ぜんぜんつかまなくなつてさー、準備間に合わなかったらどうしようかと思つたよー」

夕貴が苦笑して、中野をボカツと叩いた。

「うっん、中野はお店貸してくれたたり、色々準備してくれたんだもん。私で役に立ってよかったよ」

「でも、まっさか、御堂と一緒にくるとはねえ」

そう言って、ニヤニヤ笑う夕貴と中野……

「それは、偶然会っただけで……」

なんか、ヤな感じだな……

私がそそくさと逃げようとする、夕貴が私の腕を掴んで厨房に引っ張って行った。中野が後から付いてくる。

??

「で！ 聞いたの？ 言ったの？」

夕貴がドアップで顔を近づけてきて聞く。

わっ。

顔に、唾がかかっているんだけど……

私は、夕貴の口に両手をあてて少し距離を取ってから言った。

「な、なんの事？」

目をあわせず横を向いとぼけてみる。

「だーから、須藤さんの事！ 御堂に聞いたの？」

わわっ。

夕貴があまりに大きな声を出すものだから、私はあわてて夕貴の口をふさいだ。中野も少しあわてて。

「夕貴、声デケーよっ」

口到人差し指をあてて、シイーって言ってボカツ。

また、夕貴が中野を殴った。

「いってーなあ……」

中野が頭を押さえながら、涙目になって抗議する。

「声がでかいのは、アンタよ!」

負けずに、夕貴が言う。

この二人、似てるな!。

そんなことを考えて、見ていると。

ギョロツ。

四つの目が同時にこっちを向いた。

わわっ。

迫力つつっ!

「で! 聞いたの? 言ったの?」

夕貴が、さっきとまったく同じことを言ったけど、もう突っ込まずに答える。

「何も。聞いてないし、言ってない」

言っていない、はたぶん“好き”ってことだと思って、とりあえず答えておく。

「なんでー、二人つきりだったんでしょー？ チャンスだったんじゃないのー？」

「そーだって。晃紘あきひろは、譲ちゃんのこと好きだと思うよー」

中野が、顔を掻いて、何かを考えながら言う。

中野と夕貴と私と御堂君は3年間ずっと同じクラス。その上、中野と御堂君は同じ野球部だったから、仲がいい。

私が御堂君を好きだということは、誰にも言ったことがなかったけど、この二人にはばれていたみたい……

「それは、違うと思うけどなあ……」

私は小さな声で、中野の言葉を否定する。

だって、もしもよ。

「もしも、御堂君が私の事を好きだったなら、奈緒と付き合い合ったりしないんじゃないかな」

そう言うよ。

「んー、そうかな？ そうとは限らないんじゃない？」

って、夕貴が言う。

私には、よく理解できないけど……好きな人がいても、他の人と付き合えるのかな？

「じゃあさ、晃宏に聞けないなら、須藤に聞いてみれば？」

そう言う中野の言葉で、奈緒からメールが来てて、その返信をまだしていなかったことを思い出したの。

「あっ、奈緒に謝らないと……」

そう思って、店内に出て行って奈緒を探した。

???

店の隅の方で奈緒の後ろ姿を見つけて、声をかけようとした時。奈緒の近くを御堂君が通りかかって、奈緒が呼びとめた。

「晃紘！」

御堂君が奈緒を見て、奈緒が笑いかけていた。そんな二人の姿を見た瞬間。ツキンッ。

胸が痛んだ。

奈緒に声をかけそびれて、二人のすぐ側についたらっっていた私に、奈緒が気づく。

「譲子？」

「あっ、奈緒……ひさしぶり」

「久しぶり！ 譲子、元気だった？」

そう言って、奈緒が私の両手を掴んで握ってきた。

「うん。あの、メールの返信できなくてごめんね。同窓会の準備手  
伝ってて、返信するの忘れて……」

握られた手の感覚がなくて。

私は斜め下を見ながら謝った。

「ううん、いいのよ、気にしないで。高校はどう？ あっ、晃紘と  
同じ高校だったよね？」

言って、奈緒は御堂君を振り返った。

御堂君は、眉間にしわを寄せて。

「ああ、今は同じクラスだよ」

って。

「そうなんだ。じゃあ……もう言った？」

奈緒が少し笑って、御堂君に聞く。

御堂君は、ただ黙ったまま首を横に振った。

二人が私にはわからないことを話していて、また胸が苦しくなっ  
てきて、目を瞑った。

できれば、奈緒に握られてる手も、振りほどきたかったけど、そ  
れはできなかつた……

「あのね、私たち、別れたのよ」

奈緒が、そう切り出した……  
その言葉に、私は、えっ？ と顔を上げる。  
奈緒は、握った私の手を見ていて、その向こうに立っていた御堂君と目があった。

でも、御堂君は私から目をそらしたの……

「それは、聞いたけど……」

やっとの思いで、私がそう言うと。

ぱっと、掴んでいた手を奈緒が離して、御堂君のそばまで行って、見上げた。

「そうなんだ。言ったのね？」

「ああ」

御堂君は、私の時とは違って、まっすぐに奈緒の目を見て頷いた。  
それから、奈緒はこう言った。

「譲子……、晃紘が本当に好きなのは、譲子なのよ」

囁くような奈緒の声は、がやがやと楽しそうに騒いでいる周りの声にかき消されそうだったけど、私の耳にはハッキリと聞こえたの。  
御堂君が好きなのは……、私？

その瞬間。

ダツと、私は駆け出した。

店の入り口で夕貴にぶつかって、どうしたのって聞かれたけど、ちよつと涼んで来ると言つて、そのまま外に飛び出した。

## まさかの告白

外に出ると、一つ二つ、星がキラツと光った。

七月も終わりに近づいて、夜でも外の空気はもわっとした熱を感じさせた。

店を飛び出した勢いそのまま走り、少し行ったところで止まって。  
はぁー、はぁー。

膝に手をつけて、肩であらい呼吸をする。

さっき、奈緒はなんて言った……？

頭を必死に動かして、さっきの事を思い出そうとするけど。  
ピリツ。

また胸が痛んで、その場にしゃがみ込んだ。

タツ、タツ、タツ……

後ろから足音がして、月明かりで出来た人影が私のすぐ後ろで止まった。

御堂君が追いかけて来たんだ、って分かったけど、私はしゃがんだまま、膝に顔を埋め込んでうつむいた。

「桜庭……」

さあーっと、暖かい夜風が吹いて、木の葉がさやさやと揺れた。  
私は、葉の音と一緒に御堂君の声を聞いていた。

「俺は、桜庭が好きだよ……」

その言葉に、体がびくつと反応する。

それでも、顔を膝につけたまま、黙っていた。

「中学の時……桜庭のことは仲のいい友達だと思ってた。だから、奈緒に告白された時も、ただ嬉しくて、それだけで付き合いたしたんだ。」

しばらくして、奈緒に、他の女の子と仲良くしないでほしいって言われて。奈緒がそうしてほしいなら、そうしようと思った。

だけど、桜庭と話さなくなって、寂しくて、毎日がつまらなくて

……

それでやっと、俺は桜庭の事が好きなんだって気づいた。奈緒には正直な気持ちを話して、年が明けた頃には別れた……」

「うそ……」

私は、思わず顔をあげて、御堂君を見た。

「だって、卒業式でも、御堂君と奈緒は仲良さそうにして……」

卒業式、御堂君と奈緒が笑いあっているのを、遠くから眺めている自分がいた。その時の事を思い出して、また胸が痛くなる。

「奈緒とは、別れても今まで通り、友達として接してほしいと言われたから。」

すぐに、桜庭には自分の気持ちをおうと思った。でも、その頃は登校日もほとんどなくて、会えない日が続いてタイミングを逃して。高校が同じだって知った時も、せめて桜庭とは、以前のような友達に戻りたいと思ってた……」

うそ……

私は、首を横に振って言った。

「そんな……、だって、廊下ですれ違った時も、目も合わせてくれないで。」

同じクラスになった時だって、なんにも……、私、嫌われたのかと思ってた」

「いつも、話しかけようと思った。けど、なんて声かけたらいいかわからなかった。だから、朝、駅で会った時はチャンスだと思って、桜庭も普通に話してくれたし。」

でも、N高のヤツと一緒にいるのを見て、焦った。もしかして付き合ってるのかって、それからずっと気になって、さっき友達だって聞いて安心したんだ」

そこまで言って、御堂君が私を見る。

瞳の奥に切なさを宿して、真剣な顔で言ったの。

「俺は、君が好きだ」

そう言った御堂君のきれいな瞳が、一瞬うるんだ。

「付き合ってほしい」

「わたしは……」

そこまで、言って、言葉に詰まる。

突然の告白に驚いて、頭の回転が鈍る。  
胸が、ジリジリ痛んで、顔をしかめる。

私は、どうしたいんだろう……

なんて言えばいいのかわからない。

黙りこんでると。

「答えは今じゃなくていい。俺だって、自分の気持ち伝えるのにこんなに時間がかかったんだ。だから、桜庭もゆっくり考えてから、  
答えをだしてほしい」

御堂君がそう言ったのとタイミングよく、夕貴がやってきた。

その場の雰囲気とかお構いなしに、右手を振り上げて叫ぶ。

「さあ、二次会に行くぞー」

そう言って、私の腕を強引に引っ張ってたぬき亭の方へと、ずんずん向かう。

すでに、たぬき亭の前には、わらわらと同級生たちが出てきて、二次会に行くか行かないかを話していた。

一人、二人と、二次会には行かないで帰る子たちが、別れを告げて去っていく。

そんな中、私はただひたすら御堂君の事を考えていた。

だから、夕貴に手を引かれるまま二次会へ行き、そして三次会へ

……

気が付いたら、カラオケルームの中。

とっくに終電の時間は過ぎ、三次会のカラオケオールメンバーの中に自分がいたのだから。

ビックリ！

## まさかの告白（後書き）

現在は条例でゲームセンターやカラオケ店の18時以降は16歳未満の立入禁止・22時以降は18歳未満の禁止となっています。

7月25日・・・遭遇

時計を見ると。

すでに、零時をまわって、二十五日になっていた。

家に連絡をしなきゃと思いついた携帯を開くと、自宅からの着信が何件も……

私はあわててカラオケルームから出て、電話ができる静かな場所を探した。

カラオケ店から出て、脇にあった非常階段のそばで家に電話をする。

お母さんには、遅くまで連絡しなくて、すっごく怒られたけど。

もう終電もないし、友達も一緒ということで、お父さんには内緒にしてくれると言った。

はあー。

電話を切って、ため息をついて、非常階段に座り込む。

今日は、あつ。昨日は、いろんなことがありすぎて……

なんだか、目眩がするよ……

ピロロロン。

両手で握りしめていた携帯がなって、見ると夕貴からの電話だった。

「はい」

立ちあがって、電話に出る。

『もしもし、譲子？ いまどこにいるのー？』

ガヤガヤと、受話器から夕貴の声以外に歌う声やら笑い声が混じって聞こえて、聞きとりづらかった。

「あつ、今、外で家に電話してたの」

『なんだー。急にいなくなって、なかなか戻ってこないから心配したよー』

「ごめん、もうちょっとしたら戻るから、心配しないで」

そう言って、電話を切った。

再び、非常階段に座って、足の前に肘をつけて顔を支える。

ため息亭での事を思い出す。

私、御堂君に好きって言われたんだよね。付き合ってたって言われたんだよね。

なんだか現実感がないな。

中学の頃、好きだった御堂君に、告白されちゃったんだよ、私

……

御堂君の真剣な顔を思い出すと、切なくて、涙がでそうだった。また、胸がドキドキしてくる。

どうしたらいいんだろう。

まさか、告白されるとは思ってもみなくて……

御堂君の事は、好きだったけど、けど……

そう。

もう過去形……なんだよね。

好きだったけど、二年間話さないで、いまさら付き合つとか考えられないし……

断る……の？

そう思った時、カラオケ店から出てきた御堂君が、辺りを見回して、私を見た。

私を見る……

ドキン、ドキン。

御堂君に、じいーっと見つめられて、鼓動が速くなってきた。

私はまだ、こんなに御堂君にドキドキするのに、断るの？ そんな考えが頭をよぎる。

御堂君は、私を見つめたまま足を止め、それから、こっちに向かって歩いてきた。優しく笑って、私と少し距離を取って非常階段に座った。

たったそれだけの行動が、すごく長く感じて、私はその間ドキドキしっぱなしだった。

ああ、私、まだ御堂君に未練たらたら……  
そう思った。

「桜庭がない、って三井が大騒ぎしてた」

くすつと笑って、御堂君が私を見た。

「うん、さっき夕貴から電話があった。ちょっと家に電話してただけなの」

そう言って、額にかかった髪を耳にかけて、御堂君から目をそらして地面を見た。

「俺も心配した。俺のせいで悩ませてるかと思って……心配した」

えっ……

ガバつと顔を上げると、御堂君と目があった。

二つの瞳の中で、やさしさがきらめいて。その顔があまりにも綺麗で、胸に沁み入って、涙が出そうだった。

「違うの、私は御堂君のことが……」

そう言った時。

「譲子さん!」

カンナの声がした。

見ると、通りの向こうにカンナがいて、道路を走る車をよけながらすごい勢いで駆けてきた。

はぁ、はぁと呼吸を整えながら、御堂君を見る。何かを強く思い定めたような真剣な表情で。

しばらく、御堂君を見てから、私の方を見てカンナが言った。

「譲子さん、なんでこいつと？」

「カンナこそ、どうしてここに？」

突然現れたカンナに、私も疑問に思っただけだ。

「俺の事はどうだっていいんだよ！ 昨日もコイツと会ってたのか？」

ええっ？

カンナが、とっつても怖い形相で聞いてくるから、びっくりしちやった。

7月25日・・・遭遇（後書き）

現在は条例でゲームセンターやカラオケ店の18時以降は16歳未満の立入禁止・22時以降は18歳未満の禁止となっています。

## それぞれのキモチ

「それは、一緒だったよ？ だって同窓会なんだから？」

ぼかんっ、としてしまったの。

カンナが怖い顔であまりにも普通の事を聞いてくるから、私はなんでそんなこと聞くのかよくわからなくて首をかしげながら答えた。

「だけどメールで……」

その続きを言おうとして、カンナが口に手を当てて、横を向いてうつむいた。うつむく前に、一瞬、御堂君を見たことに気づいて、私は御堂君を振り返った。

御堂君は、カンナをまっすぐ見ていた。

「俺がない方がいいなら」

そう言って立ちあがって、私に先に店内に戻ってると言って、カラオケ店に入って行ってしまった。

???

しばらくの沈黙の後。

「あぁーっ」

急に大きな声をだして、カンナがその場にしゃがみこんだ。  
頭をわしゃわしゃ掻きむしってる。

私は、わけがわからなくて、おろおろ……  
しゃがみこんだカンナの近くに行つて、カンナの顔を覗き込んだ。

「なんで、あんなメール送つたんだよ……」

ぼつん、とカンナが小さな声で言う。

私の服の裾を、ちよんつと引つ張りながら。

「えっ？」

メール？

私は首をかしげて、手に持っていた携帯を見て、あつと思ひ出す。  
カンナに、書きかけのメールを間違えて送っちゃったことを！  
あわてて携帯を開いて、送信ボックスの一番上にあるカンナへ送  
つたメールを開く。

『To: 菊池 カンナ

subject: 了解！

本文: 10時ね。

そう、同窓会。いま御堂君に会つて』

『会つて』の書きかけでメールが送られていた。

カンナはこのメールを見て、私と御堂君が同窓会以外でも会つて  
いたと勘違いしたの？

ぶっ。

「あははっ  
」

私は、思わず笑っちゃった。

だって、みんなみんな、勘違いだらけなんだもん。

世の中、勘違いで成り立ってるのかしら……

笑いすぎて涙目になってる私を、今度はカンナがぽかんと見つめている。

一通り笑いが収まって、手の甲で涙をぬぐう。

「ごめん……、なんかおかしくなっちゃって」

カンナが、じーっと私を見てる。

「違うの、メールは書きかけで間違えて送っちゃったんだけど、そのことすっかり忘れてて。」

昨日は、同窓会の前にぶらぶらしようと思って早く行ったら、偶然御堂君に会って、同窓会の準備の手伝いに行くっていうから一緒に手伝いして。

今も、同窓会の三次会のカラオケに来てて、家に連絡するために外に出たの」

カンナは、私が話すのを静かに聞いてくれた。

それから。

はあー。

っと、ため息をついて、腕を前にのばして。

「そっか」

って、それだけ。

「心配した？」

私が笑って聞くと、カンナが苦笑して答える。

「うん。譲子さんとあいつが付き合っちゃうかと思った」

澄んだ瞳の中に甘やかなきらめきがあって、うっとりするような甘い顔で見つめられて、つい見とれてしまっただけ。

ドキってしちゃった。

それから、少しカンナと話して、カンナも昨日は昼過ぎから友達と会ってたこと。そのまま、カラオケオールになったことを教えてくれた。

「そろそろ行かないと、友達、待たせてるから」

そう言って、カンナが立ちあがった。私も、立ちあがる。

「今日、どうしよっか？」

「えっ？」

今日？

私がかよとんとして、聞き返すと。

「デート！ 約束したでしょ？」

そう言っつて、ニヤツと笑った。

あつ、そつか。カンナと約束してた二十五日って、もう今日なのか……

「俺も譲子さんもオールで、そのまま朝合流してもいいけど。譲子さん疲れちゃわないかな？」

そう言っつて、私の事を心配してくれるカンナの優しさが、嬉しくつて。

結局、今日のデートは延期することにした。

??

カンナと別れてカラオケ屋に戻った私は、夕貴につかまって今までどうしてたのかつ、御堂君とどうなったのかつて、しつこく聞かれた。

なんだか、その食いつきっぷりが沙世ちゃんみたいで笑えてしまった。

夕貴には、いっぱい心配かけて、相談にも乗ってもらったけど、まずは、御堂君本人に返事をしなければと思い、後でちゃんと報告するねと言っつて御堂君を探した。

カラオケでは、数人ずついくつかの部屋に別れてたから、同級生のいる部屋を一つずつまわつて、御堂君を探した。

朝までカラオケして、始発で家に帰って、一眠りして  
お昼ごろに起きたら、奈緒から電話がかかってきた。

## それぞれのキモチ（後書き）

現在は条例でゲームセンターやカラオケ店の18時以降は16歳未満の立入禁止・22時以降は18歳未満の禁止となっています。

のびのびになった・・・デート？

「今日、いいお天気になってよかったね！」

私がカンナに言うと。

「うん、まあ、そうなんだけ……」

そこまで言って、カンナが後ろを振り向く。

「なんで、こいつがいるんだ？」

そこには、御堂君。それから、中野と夕貴。

今日は、私とカンナの、のびのびになったデートの日。  
県外にある遊園地に来ているのだけど。  
なぜか、御堂君と中野と夕貴が一緒だった。

???

あの日。  
同窓会の三次会で、カラオケルームに戻った私は、御堂君を探して自分の気持ちを伝えたの。

「あのね、私も中学の時、ずっと御堂君のことが好きだったよ。でも、今は……って聞かれると、正直、わからないの」

私は、自分の曖昧さが恥ずかしくて、頭をかく。

「だから、また友達から仲良くしてもらえると嬉しいんだけど……」

なーんて……、ずうずうしいお願いだとは思ったけど、それが私の気持ちだった。

「桜庭がそう言うならそれでいいよ」

御堂君は、優しく笑ってそう言ってくれた。

それから……

「友達からよろしく」

手を差し出してきたから、その手を握ると。  
ぐいっ。

っと、御堂君の側に引き寄せられて。

急に引っ張られてとよろけた私を、御堂君が受け止めて。

「また俺の事を好きだっと思って思わせてみせるよ」

耳元で、御堂君が魅惑的な声でささやいて。

ニコって、うっとりするような甘い顔で笑う。

ドキンッ。

そんな顔で、そんなことを言うんだもん。

私は、かぁーっと顔が赤くなるのを感じた。

??

「俺は、桜庭が遊園地に行くっていうから、一緒に来たただけだけけど？」

しれっと、御堂君がカンナに言う。

「なっ、今日は、俺と譲子さんのデートなんだけど！ ついてくるな！」

カンナが御堂君に食ってかかった。

そんな2人を、中野がまあまあと云ってなだめてる。

私という時のカンナは大人っぽく感じるけど、御堂君といるとカンナが一つ年下って実感するっていうか、御堂君が大人っぽいつていうか……

私は苦笑した。

「ね、御堂君はいいとして、なんで夕貴たちが来てるの？」

カンナ達が歩く後ろで、私は夕貴に聞いた。

遊園地に行くことを御堂君が知ってるのは、この間会った時にしやべったからなんだけど。

なんで夕貴と中野が知ってるの？ っていうか、なんでついてきたの？

私が不思議そうに首をかしげると。

「おもしろそうだったから！」

夕貴が、ニヤッと笑って言う。

「えっ……」

そんな理由……？

あつげにとられてると、夕貴は前にいる中野達のところまで駆けていく。

私も、あわててみんなの後を追った。

なんだかんだで、五人仲良く遊園地を満喫した。

やっぱりカンナは、すぐに誰とでも仲良くなれちゃうんだなっとしみじみ思う。

一通りアトラクションに乗ってから、夕貴と中野はお土産を見ると言って売店に行ってしまった。

私は、ベンチに座って待っていると。

はあー。

っと、大きなため息をついて、カンナが右隣に座った。

「疲れた？ ごめんね、カンナは2人で出かけたと言ってたのに、なんかみんなついてきちゃって……」

手元をいじりながら、もごもごと言いつつ訳す。

「御堂さんのこと、譲子さんが誘ったわけじゃないの？」

カンナがそう言って、こっちをじいっとみつめる。

「違うよ……」

息が止まりそうなほど綺麗なカンナの瞳が、私をまっすぐに見ていた。

その瞳にみつめられて、目がそらせなかった。

ぎゅっ。

カンナの左手が私の膝の上に置いてあった手を掴んで、右手で額に落ちた髪を耳に駆けてくれた。

それから、唇を動かして、何か言おうとしたの。

でも、その瞬間。

今度は、左側から、グイって。

肩を引き寄せられて……

びっくりして見上げると、そこには、端正で彫の深い御堂君の顔。きゅっ。

美形のドアップは迫力だわ。

「桜庭、はい」

そう言って、ソフトクリームを渡す御堂君。

「ストロベリー、好きだったろ」

「あつ、ありがとう」

お礼を言って、受け取ると。

「どういたしまして」

御堂君が、うっとりするような甘い顔で笑った。

うう。

御堂君って、こんなによく笑う人だったかしら……

ステキすぎて、胸がドキドキしてきた。

私は、自分の心臓の音が聞こえてしまわないか心配しながら、誤魔化すようにソフトクリームにかじりついた。

そんな私を間に挟んで。

カンナと御堂君が、お互いをじーっと見ていた。

カンナは、何か言おうとしたところを邪魔されて、ちょっとムっとした顔で、威圧的に。

御堂君は、涼しげで、だけど挑戦的な瞳で。

もちろん私は、恥ずかしくって下を向いてソフトクリームを食べ  
ていたから。

そんな2人の様子にはぜんぜん気づいていなかった。

## のびのびになった・・・デート？（後書き）

これで、いちお第2章完結です！

譲子は御堂君への長かった片思いに終止符を打つことが出来ました。さてさて、カンナは、御堂君という強敵なライバルが現れて、今後どうするのでしょうか??

御堂君は譲子のことを好きだと再認識し、振られるも、猛アタックをかけてますね〜

なんか、クールだった御堂君・・・とっても積極的になってますっ、カンナの影響かな？

今回は、間章を2つほど挟んで、第3章に行く予定です。

## 電話

ふあゝ。

大きなあくびが出て、手でおさえる。

はじめてカラオケオールして、始発で帰ってきて寝て、さっき起きたところ。

いまはもうお昼前。

ううーん、っと両手を思いっきり上にのばして、体を起こす。

今日も出かける予定だったけど、その予定は延期になって。

さて、どうしようかと考えてると……

ピロロン。

携帯が鳴った。

見ると、奈緒からの電話だった。

ピロロン、ピロロン。

鳴り続ける電話。

昨日、同窓会で会った奈緒とは、たぬき亭で話してる途中に駆け出して行って、そのままだった……

「はい」

電話に出ると、受話器の向こうから奈緒の声が聞こえた。

『譲子？』

「うん。どうしたの奈緒？」

きつと、昨日のことで話があるんだとは分かっていたけど、そう聞いてしまった。

『メールで、話したいことがあるって言ったでしょ。昨日は、あんなことになっちゃって……ちゃんと話せなかったから……』

……

しばらくの沈黙。

『晃紘から聞いたかな……私たちのこと』

「うん……聞いたよ」

私たちの事、って言われると、胸がツキンと痛んだけど。

昨日と違って、ここから逃げ出したいような、辛い痛みではなかった。

『私が……譲子も晃紘のことが好きだって気づいたのは、晃紘と付き合い始めて少したった頃だったの。晃紘が譲子の事好きだって気づいたのもその時……』

私は、奈緒が話すのを静かに聞いた。

『中学三年の時、譲子とも、晃紘とも初めて同じクラスになって。席が近かった、譲子とはすぐに仲良くなったよね。』

はじめて、晃紘を見た時、かつこいいなって思った。一目ぼれだったのよ。』

よく、譲子と晃紘が一緒に話してたでしょ。それで、私も晃紘と話すようになって、話しても楽しい人だなって思ったの。』

それで告白して、付き合い始めたんだけど。』

晃紘は、私と二人の時は、ぜんぜん話さないし、ほとんど笑ったりしないの。』

奈緒が苦笑する。

『あれっ？ って思った。譲子という時と違うな……もしかして……って。』

いま考えたら、ばかみたいよね。譲子も晃紘も、お互い好きだったから、あんなに仲良かったのに、気付かないなんて。晃紘は譲子の前でだけ、たくさん話すし、よく笑ってた。』

それで私、譲子に晃紘を取られたくなくて、晃紘に譲子と話さないでっってお願ひしたの。晃紘は優しいから、わかつたって言うてくれたけど、それからずっと寂しそうにしてた……あんなこと言うて、本当に後悔してる。』

もっと早く別れてれば……、譲子と晃紘がこんなにすれ違ふことなかったのに。私のせいで、二人の仲が壊れたんだって、ずっと責任感じてた。でも、なかなか言い出せなくて……。』

『じゅめんね』

奈緒が、最後にそう言った。

「ううん。私も、あの時ちゃんと自分の気持ちを言えなかったから。ちゃんと伝えていたら違ったかもしれないし」

奈緒がすべて悪いとは思っていなかったから、そう言った。

「だから、もういいの。だって二年も前の事だしね」

私は笑って言った。

## デート前夜革命

夏休みが始まって一週間が経った。

私は、午前中は部活へ行き、お昼ご飯を食べに一度家に帰ってきてから、午後は市の図書館に夏休みの宿題をやりに行っていた。

その日も、市の図書館の談話室で本を何冊か借りて読みつつ、勉強をしていた。

トン、トン。

肩をたたかれて振り向くと、そこに御堂君がいた。

「隣、いい？」

そう聞かれて、うなずく。

御堂君は、椅子を引いて私の横に座ると、鞆からノートや参考書、筆記用具を出して、黙って勉強をし始めた。

だから、私も黙ってやりかけの問題集をまた解き始めたの。

問題集をきりのいいところまでやって、ふうーと一呼吸。

ぱたんと、問題集を閉じる。

ふと、隣を見ると。

御堂君が片肘を机について、こっちをじーと見てて目が合った。

「終わった？」

そう聞く御堂君の机を見ると、すでに問題をやり終えたのか、参考書などは閉じられて、綺麗に脇に片付けられていた。

「うん。今日はここまでで終わりにしようと思って」

御堂君は、私の勉強が終わるのを待ってたようで、そう言つと、小声で聞いてきた。

「桜庭は、よく図書館来るの？」

「夏休みになってから、平日はだいたい来てるかな。御堂君もいつも来てるの？」

「いや、俺は調べ物があつて来たんだ」

「そうなんだ」

「桜庭、中学の時も、学校の図書室によく行ってたよな」

御堂君が思い出したように言つて、ふつと笑つた。

「よく覚えてるね……、そんなこと」

私はちよつと恥ずかしくなつて言つと。

「ああ、覚えてるよ」

懐かしそつに言つて、うつとりするような甘い顔で笑つた。

「また……図書館来ようかな」

そう言って、ぐうんと、両手を上に上げて、座ったまま背伸びをする御堂君。

「まだ調べ物があるの？」

私が、首をかしげて聞くと。

「いや。図書館に来て、また桜庭に会えるなら、来てもいいかなと思ってる」

くすつと笑って言った。

その言葉に、ドキンって、私の胸がはねた。

自分でも、カーッと、一気に顔が赤くなってくるのが分かった。御堂君は、そんな私を涼しげな瞳で斜めに見て、ふつと笑ったの。

??

それから、本当に、御堂君は毎日図書館にやってきた。

私が勉強していると、声はかけずに隣に座って、読書したり勉強したりして、私がりりのいいところまで終わるのを待ってから、少し話して、一緒に帰るのが定番になっていた。

「図書館なんて、めったにこないけど、涼しいし……いいな」

図書館からの帰り道。

御堂君が感慨深げに言った。

「だよ、私も図書館好き。なんか落ち着くんだよね」

くすつと笑って、私も頷いた。

ピロロン。

携帯が鳴って、みるとカンナから電話だった。  
御堂君は私を見る。

「電話？」

「うん」

「どいぞ」

そう言うから、私は電話に出た。

「もしもし」

『……………』

「うん、今大丈夫だよ」

「うん、日曜日の10時にM駅ね。うん、うん。クスクス。大丈夫、わかってるよー」

そう言って、私は電話を切った。

携帯を鞆にしまっていると、御堂君が前を見たまま聞いてきた。

「もしかして、菊池？」

「えっ？」

私は、ドキンっとした。

まさか、御堂君の口からカンナの名前が出てくるとは思わなかったから。

それに、今の会話でわかつちやうなんて……

「菊池と、日曜出かけるの？」

「うん。実は、同窓会の次の日に遊ぶ約束してたんだけど、私もカンナもオールしちゃって。それで、予定をずらして、日曜に遊園地に行くことにしたの」

「そう……」

言って、御堂君の涼しげな瞳が、一瞬、いらだたしげに光ったように見えて。

私は、びっくりして御堂君を見上げると、御堂君ははっとしたように顔をそむけた。

「俺も、一緒に行つていいかな？」

振り返つた御堂君が、魅惑的な甘い声で言つて、私をじーっとみつめていた。

「えつと……」

私は、言葉につまつてしまつて、うつむく。すると。  
くすつ。

「冗談だよ」

御堂君がそう言つた。

びっくりして振り仰ぐと、そこには、息が止まりそうなほど綺麗な瞳があつて、にこつと笑つた。

「じゃ、俺、こつちだから」

そう言つて、御堂君は片手をあげて、分かれ道を曲がつて、行つてしまつたの。

私は、その場に呆然と立ち止まつて、しばらく御堂君の後ろ姿に見入つてしまつた。

御堂君が、あんな顔で私を見るから、信じられないくらい胸がドキキしてる。

うー、緊張した。

まったく、なんで御堂君はやたらに色っぽいのかしら。そして、そんな色っぽい目で見つめて、うっとりするような甘い声でしゃべ

るのかしら。

私は、なんだかわからないけど、どっと疲れてしまった。そして、とぼとぼと歩きだして家路に着いたのだけ。

御堂君に翻弄される日々は、はじまったばかりだということに私は気づいていなかった。

そうして、二日後。

カンナと、約束した遊園地の駅には、なぜか御堂君と、そして、中野と夕貴もいて……

カンナとのデートは、デートと言えない形で終わったのだった。

## 海へ

バスに揺られてしばらくすると、窓越しに一面の青がとびこんできた。

太陽の光が水面に反射してキラキラ光って眩しくて、私は目を細めた。

実は今日、カンナたちと海に来ているのです。

というのも、数日前……

???

クラスメイトの南沙世ちゃんみなみさよと安藤ことばちゃんあんどうと三人で買い物に出かけた時、カンナから海に行こうというお誘いのメールが来たの。

そのメールを覗き見た沙世ちゃんが。

「いいなあ、彼氏持ちは海とか行けて」

なんてことを言うの。私はちょっと呆れながら反論する。

「だから、カンナは彼氏じゃないし。友達」

「カンナ君って、譲ちゃんが朝一緒に登校してる子のこと？」

ことはが、会話に興味を示して聞いてくる。

「そうそう！ 毎朝一緒に登校してるのに、ただの友達だって言い張るんだよ」

私が答えるよりも先に、沙世ちゃんが言う。

だって、ほんとうに友達なんだもの。また、沙世ちゃんにカンナとの関係を問い詰めれて、切々と説得するのは疲れてしまう。だから、私は話題をそらそうとしたのだけど、沙世ちゃんが。

「じゃあさ、友達だって言うなら、私たちに紹介してよ！ 私も海一緒に行っていいよね？」

って、言うの。断ろうと思ったのだけど。

「私もカンナ君って子、みてみたいな」

って、ことはまで言いだして、断りきれなくなってしまった。それに、みんなで一緒に海に行くのも悪くないかなと思って、カンナに聞いてみることにした。

??

集合場所のW海岸に向かうバス停で。

「菊池カンナです、はじめまして。いつも譲子さんにお世話になってます。こっちから東条さん、河原、熊本。みんなテニス部のメンバーで東条さんは二年生、河原と熊本と俺は一年。よろしく」

「よろしく」

カナナが友達を紹介してくれて、他の三人が同時にそう言って頭を軽く下げた。

東条さんは、四人の中では唯一の二年生というだけあって、落ち着いた大人の雰囲気がある。ちょっと癖のついた髪に、すらっとした長身、だからも好かれる好青年といった印象。

河原君は、色黒、眼鏡をかけててインドア派という感じだけど、体つきはがっしりと筋肉がついている。

熊本君は、明るい茶髪でノリが良いけど、ちょっと遊び人なかんじ。

「桜庭譲子です。南沙世ちゃんと安藤ことはちゃん」

私は二人を紹介した。

そして今、私、沙世ちゃん、ことは、それからカナナ、東条さん、河原君、熊本君の七人で、海岸に向かうバスに乗っている。

バスの中、沙世ちゃんがまたあの話題を持ち出す。

「ねっ、カナナ君と譲子ってホントは付き合ってるんでしょ？」

直球でカナナに聞くものだから、私は焦ってしまった。だって、はっきり言われたわけではないけど、少なくともカナナが私の事好きなのは知ってるのに。そんなカナナの目の前で「友達」と言い切るのには勇気がいった。

私がしどろもどろしている横で、カナナは爽やかな笑顔で言った。

「あはは、沙世さん、直球ですね。まあ、ぶつちゃけ僕は譲子さんの事好きですけど、今はまだ友達です」

そんなことを、しれつと言う。

「ってか、ぶつちゃけ僕ってなんですか……、カンナったらキャラが変わってないかい？」

「ええ、付き合っちゃえばいいのに」

沙世ちゃんがそう言って、後ろから私を肘でつつく。

「いっ、痛いからやめてよ、沙世ちゃん……」

「まあまあ、沙世ちゃん。そういうのはタイミングだから」

「そう言って、笑顔で助け舟を出してくれたことは良かったけど、実はことはって笑顔の裏で何か企んでそうだから怖いんだよね。」

「沙世さんとことはさん何か部活やってるんですか？」

熊本君がそう言って話題が変わって、私はほぅつと息をついた。みんなが話に夢中になってるのを確認してから、そつとカンナに話しかけた。

「カンナ、ごめんね。せつかく海に誘ってくれたのに、友達も一緒になってお願いして」

そつ言って私は、両手を合わせて謝った。

「別に大丈夫だよ。大勢のが楽しいしね」

「ほんと、ごめんね……、遊園地の時も大勢だったし、カンナは二人きりで出かけたと言ってたのに、結局行けてなくなって……」

そう言う私を、カンナが真面目な顔で見つめる。その瞳の中に、魅惑的な光が宿って。

「そんなに謝られてばかりだと、どうせならありがとって言うってくれる方が嬉しいけど」

それを聞いて、私は申し訳なく思ってたまたごめんって言いいかけたたのを言いなおした。

「海に誘ってくれて、ありがと。今日は楽しもうね」

海岸に着いて、バスを降りる。夏休み中ということもあって、海岸は大勢の人で埋め尽くされていた。

私たちは、着替えをするために海の家に向かった。

海の家もたくさんの人で込み合っていて、狭い空間でどうにか着替えを済ませる。着替え終わって横を見ると、沙世ちゃんが念入りにお化粧を直して、髪をセットしてる。ことははと見ると、ちよこんと座って荷物を整理してた。ことはは肩までのウェーブヘアを無造作に垂らしたままにしている。沙世ちゃんの支度が終わるまで、私も髪をもう一度結び直すことにした。

三人の支度が終わって更衣室を出ると、すでに着替え終わったカンナ達が海をの家の食堂の小上がりに座って待っていた。

「お待たせ」

気合いの入った沙世ちゃんが言う。

??

更衣室で。

「私、熊本君、ねらっちゃおうかな」

って、言ってた沙世ちゃん。沙世ちゃんが海に一緒に行くと言い出したのは、カンナを見たいっていうのも理由だけど、もう一つに、出会いを求めてだったみたい。

??

海岸に出て、適当な場所にシートを引いて、海の家でレンタルした大きなパラソルを広げる。

今日は、雲一つない晴天で、空の青と海の青とそのあいだの青がグラデーションになっていてとても綺麗だった。

シートを広げ終わって、荷物を置くと、沙世ちゃんが元気に言った。

「さあー、海に行こー!!」

「でも、誰か、荷物番してないといけないわね。交代ですか?」

って、冷静なことは。

「あつ、私、日焼け止め塗りたいから、先に行つてていいよ」

手を挙げて言う私。そんな私を見て、カンナが口を開いて何か言おうとしたのだけど。

「じゃあ、俺、譲子ちゃんと荷物番するよ」

つて、東条さん。

「東条先輩おねがいしまーす」

カンナは何か言いたそうにしてたけど、そう言った熊本君に連れられて波打ち際に向かつて行ってしまった。

## うちよせる波

パラソルで出来た日陰の部分にちょこんと座る。

……

……

シートに東条さんと二人きりになって、沈黙が続く。私は人見知りする性格で、初対面の人とはなかなかうまく話すことができない。間が持たなくて、とりあえず日焼け止めをぬろうと、鞆から日焼け止めを出して塗り始めた。

「譲子ちゃん、前に一度会ったことがあるんだけど覚えてる？」

って、東条さん。

突然聞かれて、東条さんを仰ぎ見て、首をかしげる私。

「やっぱ、覚えてないか……、部活帰りに駅で、菊池が譲子ちゃんの事追いかけていったことあったでしょ？ その時、菊池と一緒にいたんだけど」

って言うの。私は頭をフル回転して、その時のことを思い出す。

そういえば、カンナに会った次の日に、そんなことがあったよな……

「ごめんなさい、覚えてなくて」

私は、言葉を選びながら謝って、東条さんを見た。

「あの日は、ちょっと考え事してて、それにカンナとはあの前の日に会ったばかりで緊張してたから、周りの人とかぜんぜん記憶になくて……」

記憶にない、とか言ったら失礼かしら。でも正直に言うしかないよね。申し訳なく思いながら言った私に、東条さんは違つところにビックリして。

「えっ？ あの時、菊池とは会ったばかりだったの？」

「実は、そうなの」

「てつきり、もっと前から知り合いだと思つてた……」

「ぜんぜん違うの。突然、電車で声かけられて。まだ知り合つてから二カ月しかたつてないの」

そう言つて、自分でも改めてこの二カ月を振り返つてみると、短い間にいろいろあつたなとしみじみ思う。

それから、日焼け止めを塗る間、東条さんとはいろいろ話した。得意科目の話、学校の話、部活の話、夏休みに行った場所の話。なんか、東条君 えっと、同年なんだからさん付けじゃなくていいよつて東条君に言われて って、第一印象は大人っぽいと思つたけど、話していると安心するつていうか和むつていうか、かわいい人だな。

私のまわりにいる同年代の男の子つて、御堂君にしてもカンナにしても、話し方が色っぽくて、いちいちドキドキしてとっても緊張するのよね。

その点、東条君は和み系でいいわ。

そんなことを考えながら、日焼け止めを塗つて、一通り塗り終わ

った時、カンナ達が戻って来た。

すでに海に入ってきたようで、体に水滴がついて、涼しげなみんな。

「海、冷たくて気持ちよかったよ。譲ちゃんも入っておいでよ」

ことはが笑顔で言う。

「うん、ありがとう」

そう言った私を、やっぱり何か言いたそうに見てるカンナの視線に気づく。

「譲ちゃん水泳部だもんね、早く泳ぎたいでしょ？ 今度は私が荷物番してるから行っておいで」

「あー、泳いだら喉乾いちゃった。私もちよつと休憩ー」

そう言っつて、沙世ちゃんがシートに座って私に手を振ってくれた。河原君と熊本君もそれぞれペットボトルを取り出して飲んでる。みんな休憩するみたいだしと思い、私は東条君を海へ誘った。

「じゃ、行ってこよっか」

「ああ、じゃ荷物よろしく。行こう譲子ちゃん」

そう言っつて、歩き出した。その後ろで。

シーツの横で立ったままだったカンナに、ことはが他の人には聞こえない様な小さな声で言う。

「気になるんでしょう？ 行ってきていいよ」

満面の笑みで。

カンナは、頷いて、私たちの後を追ってきた。

「譲子ちゃん、水泳部なんだ？ なんか、そんな感じするね」

そう言った東条君。

「そうかな？ 水泳部の子ってみんな焼けてて、水泳部には見えな  
いって言われることが多いんだけど……」

「そう？ そういえば、日焼け止め念入りに塗ってたけど、焼けた  
くないの？」

「ううん、違うの。私、すぐ真っ赤になっちゃう体質だから、なる  
べく日焼け止め塗るようにしてるんだ」

「譲子ちゃん、色白で綺麗だよね」

東条君が、かわいい笑顔でそう言うてくれて、私と嬉しくなった。

「ありがとう」

波打ち際まで来て、足先だけ水につかる。カラッとした空気に、  
冷たい海の水が気持ちよくて、早く海に入りたくてうずうずしてくる。

「もうちょっと海にはいるつか？」

私がそう言った時、ギュッと、後ろから両方の肩を抱き寄せられて。

ビックリして後ろを振り向くと、カンナが立っていた。

「カンナ？」

そう聞く私に、にこっと笑ってから肩にかけてた手を離して、砂浜の方を指さす。

こころなしか、東条君から離れた位置に押されたような……

「ビーチバレーするっていうから」

カンナの指先を見ると、シートの前で四人がビーチボールで遊んでいるのが見えた。沙世ちゃんと熊本君、ことはと河原君の二人ずつ、左右に別れてる。

ああ、あぶれちゃったのか、と納得。

「カンナは、泳ぎ得意？」

私は、さっきまで東条君と話してたのもすっかり忘れて、カンナに話しかけてしまった。

「んー、どうかな」

そんな風に話してる私とカンナを、少しさびしそうに見てる東条君には気づかず……

「じゃあ、泳いでみて」

そう言った私に、くすつと東条君が笑う。

「菊池は、泳ぎ得意だろ？」

「うーわー、東条さんがそんなこと言います？ 元・水泳部のくせに」

ちよつと口をとがらせて、カンナが言う。

「えっ？ 元・水泳部？」

「ああ、中学の時ね。河原も確か中学の時は水泳部だったと思うけど」

言われて、河原君が水泳部というのには納得！

あの色黒！ あの筋肉！

まあ、テニスやってても焼けたり、筋肉ついたりするけど、なんか河原君は違う感じがしたんだよね。一人でうんうん頷いて納得する私。

「でも、カンナも泳ぎ得意でしょ？」

私は首をかしげて聞く。

「なんで、譲子さんまで肯定するかな……」

眉間にしわを寄せて、カンナが私の顔を覗き込む。

「だって、男の子が海に誘うくらいだから、泳げるでしょ？」

勝手に持論を繰り広げ、決め付けた私に、カンナと東条君が顔を  
見合わせて苦笑した。

それから三人で海に入って、足が着くか着かないかの深さのところで、波で遊んだり泳いだりした。ことは達荷物番をお願いして  
ることも気になって、少し泳いで早めにシートに戻ることにした。

海から上がってシートに戻ると、ことはと河原君しかいなくて、  
沙世ちゃんと熊本君は海の家何か買いに行ったという。

### 告白×3

ビーチサンダルを履いて砂浜を歩くと、サラサラとした砂が、歩くたびに足にかかってくすぐったい。

沙世ちゃんと熊本君が海の家に行ったと聞いて、しばらくシートで待っていたのだけど、なかなか戻ってこなくて心配になってきた。十二時も近くお腹がすいてきたので、みんなの昼食を買いついでに海の家へと向かった。

私の後ろをなぜかついてくる、カンナと東条君。

うん、まあ、一人で五人分のご飯は持てないからついてきてくれるのはありがたいんだけど、さつきからカンナの様子が少し変な気がするんだよね。

うーん。

上手く言えないんだけど、なんかいつもの二割増し紳士度が上がってキラキラしてるのに、そうかと思うと時々空気がピリピリしてるし……

どうしたんだろ？

道路に面した砂浜には、海の家や移動販売の車が並んでる。お昼時間ということで、お店にはたくさんの方がいた。

沙世ちゃん達がどのお店にいるか探すのが大変そうだな。

ことはと河原君からは、焼きそばを二つとお好み焼きを一つお願いされて、着替えをした海の家に売ってたのを思い出して、まずはそこに行ってみることにした。

焼きそばを五個、好み焼を二個買って外に出て、側に移動販売のパ

ン屋があるのを見つける。

「あのパン屋さん行ってみない？」

「いいよ」

そう言って、カンナが私の肩を引きよせて歩きはじめた。私は、不思議そうにカンナを仰ぎ見ると。

「ばちんっ！」

カンナと至近距離で目があった。私はそのまま、カンナの瞳をじっとみつめた。どうして今日は、いちいち肩を抱き寄せたり、べったりくっつくのかしら。そう疑問に思うけど、声には出せなくて、その代わりにカンナの瞳の中に答えを見つけようとしたの。

すると、カンナの顔がみるみる赤くなって、ふいっと顔をそらした。

「わー、びっくり。」

カンナがこんなに顔を赤くするなんて。見ると耳まで真っ赤になっていた。恥ずかしいなら、こんなに近づかなければいいのに……そんなことを考えてて、ふっと前を見ると。

「私とつきあってー！」

人ごみの切れ間に沙世ちゃんと熊本君がいて、沙世ちゃんがそう言ったところに居合わせてしまったの。

その瞬間、私は立ち止まってしまった。私が止まったことで、カンナと東条君も立ち止まる。

海の家横、移動販売の自動車の裏で、沙世ちゃんが熊本君に告白してたの！

私はどうしようかと思ったけど、沙世ちゃんは私たちに気づいていないし、人が通って沙世ちゃん達が見えなくなったので、見なかったことにして戻ろうと思った。カンナと東条君も同じく思ったよ。うで、沙世ちゃんには声をかけずに三人でシートの方へ歩き出した。

わー、わー。

一人ドキドキとする。心の中で小さなおじさんが、飛び跳ねてくるくる回って踊ってるみたいに、胸がうずうずとした。

告白現場を目撃するなんて！

しかも、友達の告白なんて……びっくりだわ。

今まで告白されたことも 御堂君のはノーカウントよね。したこともないけど、リアルにその緊張感が伝わってきて、人ごとは思えなかった。

なかなか帰ってこないと思ったら、沙世ちゃん、告白してたのね。上手く行くといいけど……

そんなことを考えながら、カンナと東条君の後ろをついて歩く。シートには、すでに沙世ちゃんと熊本君が先に戻ってて、シートの上には大量に買ったパンが置いてあった。

さっきの告白のことが気になったけど、みんなの前で聞くわけにはいかないし、何より、二人が普通にしてたので、今は聞くべきじゃないと判断して、シートに座る。

みんなもシートに座って買ってきたやきそばとお好み焼きとパンを分け合って食べた。

「ご飯を食べ終わると、みんなそれぞれシートの近くで時間をつぶした。」

さすがにね、ご飯食べたすぐ後には泳げないでしょ。

太陽が空の真上に登って、パラソルの影が大きくシートを覆った。私はお腹が落ち着くまで、パラソルで日陰になったシートのはじっこの方に座って砂遊びをした。

「譲子ちゃん、ちょっといいかな？」

唐突に声をかけられて、声のした方を振り向くと東条君が立っていた。シートの方を見ると、なぜかことはしかいなかったけど、行ってきていいよ、と言うので立ち上がって東条君に連いていった。

しばらく行くと、東条君が振り返って聞いたきた。

「あのさ、譲子ちゃんと菊池って…… ホントに付き合っていないだよな？」

そんなことを聞かれてビックリ。

「うん」

付き合っていないもんね。うん、って答えるべきでしょ。

私はなんで急にそんなことを聞くのか不思議に思いながらも、東条君に聞き返した。

「それがどうかした？　なんで、みんな私とカナが付き合ってるって思いたいのかしら……」

前半は東条君に、後半はひとり言のようにつぶやいた。

東条君はしばらく海の方を見つめてて、思い切ったように私の方を向くと言ったのだった。

「譲子ちゃん、俺とつきあってほしいんだ!」

駅に向かうバスに乗り、海が後ろに遠ざかって行く。

楽しかった海での一日はあっという間に終わり、沈みかけた太陽のオレンジ色が、なごりおいしい気持ちと複雑な気持ちを一緒に、海を染めていた。

バスが駅に着き、海で遊んだ人々がそろそろ降りて散っていく。私たちもバスから降り、別れを告げた。

「じゃ、またねー」

そう言って、沙世ちゃんとはと河原君がM線の改札へ、東条君と熊本君はT線の改札へ、私とカナナはS線の改札へと向かった。のだけど……

私は、お昼の出来事からどこか上の空でぼーっとしてて、カナナが同じ電車に乗ることもすっかり忘れて、一人で改札に向かって歩きはじめた。

「待って!」

そう言って、カナナが私の手首を掴んで、引き止める。

ポーンと歩き続けて、気が付いたらすでにホームに立っていた。

カナナがぐいっと掴んだ腕に力を込めて、その勢いで後ろに倒れそうになった私を、カナナが後ろから抱きとめた。私の鼻先で、電車が勢いよくホームに進入してきた。

「譲子さん、午後からなんか変だよ？ なにかあった？」

抱きしめられた格好のまま、カンナが耳元でささやいた。

その声がせつなげでくすぐたくて、頭を金づちで殴られたように、それまでぼーっとしてた神経が戻ってきて、背中に感じる熱に体中の神経が集中した。そうして今、カンナに抱きしめられてるんだって実感したの。

肩を抱きしめたカンナの手に力が込められて、私の鼓動がドキンっとはねた。

「譲子さん、好きだ」

はじまりはいつだって唐突に・・・

「譲子さん、好きだ」

カナナが私を抱きしめたまま肩越しに言った。  
えっ？

びっくりして私が振り返ると同時に、電車が到着し、降りる人と乗る人の流れに押されるようにして私は電車に乗り込んだ。  
あまりの人の多さに、カナナを一瞬見失ってしまっ探す。

「あっ、カナナ……」

カナナは、私のすぐそばの扉の外のホームに立っていた。  
プルプル……

『電車が閉まります。白線の内側にお下がりください』

ホームにアナウンスが響き、ベルが鳴る。

私は、扉とホームのギリギリのところまで移動した。早く乗らな  
いと扉が閉まっちゃうよ、って言おうとした瞬間。

「譲子さん、好きだよ。返事は次に会った時に教えて」

そうカナナが言うのと同時に音を立てて電車の扉が閉まり、電車が動き出した。カナナは、電車から一步下がって、真剣な瞳で私を見ていた。

いつもだったなら笑顔で手を振って別れるはずが、今日はぜんぜん

違うカンナで、ツキンつと胸が痛んだ。

私は、扉に両手をつけてはりつくようにして、扉の窓から斜めに遠ざかって行くカンナを見つめた。すぐにトンネルに入り、ホームもカンナも見えなくなる。

そうなって、やっと、さっきの言葉を思い出す。

『讓子さん、好きだよ』

思いだした瞬間、ドキンっ、ドキンって胸が尋常じゃない早さで打ちはじめで、どんどん顔が赤くなるのが分かって、片手で顔を押さえた。

私、カンナに告白されちゃったんだ……

うれしい……

頬がゆるむ。

御堂君の時は戸惑いが大きくて、どうしよう？ って悩んだけど。今の気持ちは、とても明快で、自分で自分の気持ちが変わりすぎるほどだった。

私、いつのまに、こんなにカンナのことを好きになってたんだろ  
う。自分でも気付かないうちに、心の中で、好きって気持ちがあつ  
てみたい。

二年間の長い片思いを終えたばかりだったけど、いつのまにか恋  
してみたみたい。

思い返せば、カンナとの始まりはいつだって唐突にやってきた。  
出合いもそうだし、恋も……

ああ、私は、カンナのことを好きなんだ。

## 気づいたキモチ

昼メシを食べ終わって、トイレに行った時。

砂浜に譲子さんの後ろ姿を見つけて、もう泳ぎに行くの？ と声をかけようとしたら、譲子さんと一緒に東条さんがいるのが目に入った。

「譲子ちゃん、俺とつきあってほしいんだ！」

東条さんがそう言った。

「……………」

譲子さんが東条さんに何か言っただけどその声は聞こえなくて、俺は踵を返して湧き上がってきた怒りにまかせてあてもなく歩いた。

???

東条さんは面倒見が良くてテニスの腕もいいし、テニス部に入部して以来頼りにしてる先輩の一人だ。今回、海に誘ったのも、東条さんとは割と仲良くしてると思ったからだ。

なのに、今日の東条さんの行動には、どこかずっとイライラしている自分がいた。

バスの中で沙世さんが、付き合ってるのか？ って聞いてきた時、譲子さんは困った顔をしてて、その顔をみてすごくイライラした。違うって、はつきり否定されるよりはよかったのかもしれないが。あの時は、そんな譲子さんに苛立って「僕は譲子さんの事好きですけど」なんて言ったが。よく考えてみると、今までかなり積極的にアプローチしてきたものの、譲子さんに直接好きだって言ったことがなかったと気づく。

??

きっかけは些細なことだった。

最初は、同じ電車に乗ってるK高生が目に入って、なんとなく興味を惹かれて、毎朝観察した。見ていると、いつも本を読んでそのうち、なんの本を読んでいるのかな、どんな本が好きなのかなって気になりだして。

あの日、帰りの電車で彼女を見つけて、胸が跳ねた。

こんな言葉は陳腐だが、運命だと思った。

彼女の声を聞きたい。喋ったらどんなだろう。そう思った時には、もう話しかけてた。今思えば、初めから惚れてたんだと思う。話したら、もっともつと、と欲求が出てきて、一緒に過ごす時間を増やしたくてなつて。

彼女が、俺の事をただの友達としか見てなくて、そして心の奥に

は誰か違う人がいるんじゃないかと気づいた時も、長期戦でこの恋を頑張ろうと思った。絶対に、俺の方を向かせて見せる！」と。

だから、ことはさんが言ってたように、確かに気持ちを言うタイミングをはかってたのもある。

でも。

この日、焦りが出てきたんだ。

東条さんが譲子さんを見る目は、俺と同じだった。

譲子さんは、御堂さんのことをふっ切ったばかりで新しい恋をすとかそんな状況じゃないのは、夕貴さんに事情を聞いてなんとなく知っていた。でも、少しずつ俺の事を意識し始めてくれてるんじゃないかって、自信過剰になってた。

譲子さんが、東条さんと楽しげに話してるところを見るまでは……  
そんな飴細工で出来たような自信は、すぐにぼろぼろになった。

波打ち際で、東条さんから譲子さんを引き離すようにした時、見つめてき彼女の瞳が純粹すぎて、俺って、ぜんぜん男としても意識されてないんじゃないかって、愕然とした。

そのすぐ後に、だ！ 東条さんの告白現場を目撃して、そのあとの譲子さんがずっと上の空で。

長期戦とか、余裕がましてる場合じゃない。自信も余裕も、すべて吹き飛んで、頭にカツと血がのぼって……

もう、言わずにはいられなかったんだ！

「譲子さん、好きだ」

あの時の譲子さん、呆然としてたな。ちゃんと聞いてただろうか。でも、気付いた俺の気持ちを言わずにいられなかった。言っただけだから、もう進むしかないのだ。

ここからはじまる・・・

海に行った日、私はふわふわと空を歩いているような気持ちで帰途に着いた。

カンナに告白されたということよりも、私がカンナに恋していると感じたことで胸が一杯だった。

家に着いてそのまますぐに自分の部屋へ上がる。鞆を机の上に置き、ドサツとベットに突っ伏した。

カンナは『返事は次に会った時』って言ってたけど、次っていつ会うのだろうか？

いつもだったら、家に着いた頃にカンナからメールが来るのだけど……

ピロロン。

そんなことを思った時、タイミングよく、携帯が鳴ってメールの着信を知らせた。

私はベットから顔だけ上げて、机の上の携帯の入った鞆をちらっと見る。

……

メール、見たいような、でも見たくないような……

そんな複雑な気持ちが渦巻いたけど、そのままにしておくわけにもいかず、ふうーっと深呼吸をして立ち上がり、鞆の中から携帯を取り出して、メールを開いた。

『 From : 三井 夕貴

subject : やっほー

本文 : この間の遊園地、楽しかった！ また、あのメンバーで遊ぼう！

その後、御堂とはどうなった？ 』

そのメールは予想に反してカンナからではなく…… 夕貴からのメールだった。

メールをみて、どつとため息が出た。

御堂君とどうなったって……、どうもなにも、御堂君とは友達だし。今更、恋には発展しないでしょ……

だって、私は、カンナを好きだって自覚したんだもの……

今でも御堂君のことを考えると、胸がざわつく。でも、それは前みたいな、嵐のような激しいものではない。それに御堂君のことで胸がざわついても、カンナが絡めばそれだけで胸がいっぱいになるのだ。

そう、今だって、カンナからメールが来ないかどうか、それだけでいっぱいな。

今思えば、同窓会のあの夜も。

カンナが目の前に現れた瞬間、それまでもやもやしてた胸の中にさあーっと爽やかな風が吹いて靄が晴れて……私の胸の中にはカンナがいることに、あの時気づいていたかもしれない。

カンナは、うちよせてはかえる波のように、徐々に私の中で存在を主張して、いつの間にかなくてはならない存在になっていたの。

この気持ちをカンナに伝えたい。

そう思った。

御堂君の時みたいに曖昧にしたり、タイミングを見失って自分の気持ちまで見失ってしまう……そんなことにはなりたくなかった。

早く伝えたい。

早くカンナからメールが来ないかな。

そう焦がれて、カンナからのメールを待った。

でもその日、カンナからメールは来なかった。その日だけじゃなく、海に行った日以来、カンナからのメールはぱったりと来なくなつた。

もともとカンナは夏休み中、部活で忙しく、メール以外は連絡をとるすべがなかったの。

1週間経って、夏休み終了も目前となつた。

ずっとカンナからの連絡を待ってたけど、なんだか、もう待ちきれなくなってしまった。それに、連絡を待つだけじゃなくて、私から連絡してもいいんじゃないかなって思ったの。

???

私はいつも通り、部活に出るために学校へ向かって、午前中は部活に出る。それから、部活が終わると、N高へと向かった。

N高の校門に着くと、校門から中には入らず、学校の壁沿いをずっと進む。しばらく進むと壁からフェンスへと変わり、フェンス越しにグラウンドが見えた。

以前、N高の温水プールを借りたことがあって、その時、この場所からグラウンドが見えることを知っていた。

フェンスに近づいて、グラウンドを覗く。グラウンドの右手、フェンスからは少し離れたところにテニスコートがあり、ジャージやユニフォームを着たテニス部らしき人たちがいるのが見えた。私は一生懸命目を凝らし、その中にいるはずのカンナを探した。

そんなに苦労することもなく、すぐにカンナを見つけた。ジャージを着てサーブとレシーブの練習をしていた。青々としたコートの中、カンナの動きだけがスローモーションで見えて、切り取った絵のようにとても綺麗だった。

しばらく、カンナに見とれて立ち尽くした。

見とれていたことに、はっと気付いて……さて、どうしたものかと考える。カンナと話がしたかったから、部活中のカンナを捕まえようと思っただけで来たのだけど、ちょっと距離があつて、ここから声をかけるのは無理そうだった。

私はしばらく考え込んで、とりあえず、少し待つて見ることにした。

初めて見る部活中のカンナは、表情は見えないものの、テニスに對して真剣な姿勢で取り組んでいることが窺えた。

初めてテニスをやるカンナを見て、心に明かりが灯ったようにぽつと暖かい気持ちになる。こんな気持ち、いままで知らなかったまさか、こんな気持ちになるなんて、三カ月前は思いもしなかったのに……

カンナに出会ってから三カ月を走馬灯のように思い出す。

そうして、そろそろ諦めて帰ろうかなと思つた時、一瞬、カンナと目があつたような気がした。

まさかね、この距離では顔は見えないし……

でも、そう思ったのは気のせいではなかったみたい。  
カンナがこっちを向いて動きが止まり、それから近くにいる人に何か言っつて、私の方に駆けてくる。

わわっ。

カンナが気づいっつて、こっちに来るっ。

その時になって、私はあわててしまった。

カンナと話すためにきたのに、いざカンナが目の前に現れると緊張で、背中に冷や汗がでる。

「譲子さん!」

カンナが駆けてきた。

私は、フェンスに手をかけて、近づく。

「まさかこんなところにいるわけないと思ったけど、やっぱりそうだった……」

そう言っつて、額ににじんだ汗を手の甲でぬぐう。

「ごめんね、急にこんなところに来て……」

「ん？ どうかした？」

一週間連絡もとらなかつたのに、カンナが何事もなかつたようにすっごい爽やかな顔で言うものだから、一瞬、あの告白は夢だったのかな？ っと思っつてしまった。

私が目を最大限に開いて、珍獣でも見るかのような目で見つめて

ると、カンナが苦笑した。

「譲子さんどうしたの？ そんな顔して？」

「って言うのよ！」

もう、頭にきちゃって。

「一週間も音沙汰なしで、どうしたのはいんじゃないの？」

そう言って、私は横を向いた。

すると。

「……ごめん」

カンナが、ドキツとするような憂いを帯びた声で言った。私はびっくりして、カンナを仰ぎ見た。

「約束しただろ？ 次会った時に譲子さんの返事を聞くて……勢いで譲子さんに好きだって言ったから、返事を聞くのが怖くて、なんか連絡できなかつた……」

せつない顔で、そう言ったの。

私は胸がドキンとした。カンナにそんな顔をしてほしくない、そう思ったと言っていたの。

「カンナが好き！ 私はカンナが好き、それが返事だよ」

私ができる最高の笑顔でそう言った。  
カナナは、一瞬動きが止まって、それから。

「ちょっとそこで待ってて！」

そう言うと、テニスコートの向こうに駆けだした。

私はきよとんとして、カナナの後ろ姿をながめた。カナナはあつという間に見えなくなる。

どこに行っただらう……

そう疑問に思っ、首をかしげると、壁の方からカナナが走って来て、私の目の前で止まったの。

フェンス越しではなくて、目の前に。

私がつくりしていると、がばつと肩をカナナの方へ引き寄せられて、カナナの胸に抱かれていた。

「さっきの言葉、本当？ ううん、嘘でももう取り消しはナシね」

そう言って、私を抱いた腕の力を少し緩めて、見上げた私の顔を間近で見つめてくる。

澄んだ瞳の中に甘やかなきらめきがあって、うっとりするような甘い顔で見つめられて、ドキってしちゃった。

「譲子さん、大好き」

そう言って、再び、ぎゅっと抱きしめられる。

「私も、カナナが大好き」

そう言ってカナナを見上げると目があって、ふっと一緒に笑いあ

った。

こうして、電車の中という変な出会い方をした私とカンナは、友達になって、恋をして、付き合い始めた。

でも、これははじまりの扉を開いただけ。

すべては、ここからはじまる物語。

1111からはじまる・・・（後書き）

完結です！

読んで下さった方、ありがとうございますm（\_\_\_\_\_）m  
今後の参考にしますので、評価、感想など、お聞かせください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1956o/>

---

ここからはじまる物語

2011年9月17日20時50分発行